

WIAS Discussion Paper No.2007-003

キジコス府主教ニフォンの足跡  
——アタナシオス時代の修道士主教と地域社会——

The Steps of Metropolitan Niphon of Kyzikos :  
A Monk-Bishop and Local Society in the Age of Patriarch Athanasios I

橋川 裕之 / Hiroyuki HASHIKAWA

早稲田大学高等研究所 助教

Assistant Professor, Waseda Institute for Advanced Study (WIAS)

169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

Tel :03-5286-2460 , Fax: 03-5286-2470

1-6-1 Nishiwaseda, Shinjuku-ku, Tokyo 169-8050, Japan

Tel: +81-3-5286-2460 ; Fax: +81-3-5286-2470

E-mail address: hashikawa@aoni.waseda.jp

March 18 2008

## 抄録

ビザンティン末期の教会史では、ニフォンは、1265年に生じたアルセニオス派のシスマを解決に導いたコンスタンティノーブル総主教（在位 1310-14 年）として知られているが、本稿では、総主教に就任する以前、とくにキジコス府主教であった時代のニフォンの足跡が綿密に検討される。いまだ誰も試みたことのないこの作業は、ニフォンの総主教位を理解するためにも、また、彼の前任者である総主教アタナシオス（在位 1289-93 年、1303-9 年）時代の地域社会を理解するためにも不可欠である。重点的に検討される問題は、ニフォンがヘレスポントス地方の枢要都市キジコスの府主教に就任した時期と経緯、および、彼と総主教アタナシオスとの関係である。ニフォンとアタナシオスにはいくつかの顕著な類似点がある。ニフォンはヴェリア、アタナシオスはアドリアノーブルと、ともにバルカンの都市出身の修道士であり、高度な教養の持ち主ではなかったこと、総主教に就任する以前にマケドニア地方にあるアトス山で暮らしたことがあること、そして修道院長の経験者であること。こうした両者のバックグラウンドの類似は先行する総主教のアタナシオスにニフォンの選出を決意させた可能性が高く、関係する史料の分析もこの可能性を支持する。一方で、両者には政治的スタンスの決定的な相違があり、これは後年、アタナシオスがニフォンの裁判を皇帝に要請した事件の誘因となっていたことが示されるであろう。

## はじめに

本稿でその足跡が考察されるニフォンなる人物は、キジコス府主教としてよりも、コンスタンティノーブル総主教としてのほうが著名であろう。彼の総主教在位は一三一〇年五月から一四年四月までの約四年間ときわめて短命であったにもかかわらず、いくつかの事件が彼をビザンツ末期ないしパレオロゴス朝期の個性的な総主教の列に加えている<sup>1</sup>。ビザンツ史を学ぶ者にもっともよく知られているのは、一三一〇年に彼が、パレオロゴス朝皇帝の長年の懸案であったアルセニオス派のシスマを解決に導いたことである。このシスマは、ミカエル八世パレオロゴス（在位一二五九 - 八二年）が自らの皇帝権威を確立する過程で、幼帝ヨアネス四世ラスカリス（在位一二五八 - 六一年）とその摂政、総主教アルセニオス（在位一二五四 - 六〇年、一二六一年 - 六五年）を迫害したことを受け、総主教アルセニオスを支持する修道士や聖職者が中央教会から離脱して始まったものである。アルセニオスの復権を目指す彼らの運動は、廃位されて視力を奪われたヨアネス・ラスカリスに同情的な小アジアの住民や首都の一部の貴族をも巻き込み、帝国の一体性を内から揺る

---

### 【略号】

- Darrouzès, *Regestes* = J. Darrouzès, *Les Regestes des actes du Patriarcat de Constantinople*, vol. 1: *Les actes des Patriarches*, fasc. 5: *Les registres de 1310 à 1376* (Paris, 1977)
- Dölger, *Regesten* = F. Dölger, *Regesten der Kaiserurkunden des oströmischen Reiches von 564-1453*, vol. 4: *Regesten von 1282-1341* (Munich, 1960)
- Gregoras = *Nicephori Gregorae Byzantina Historia*, ed. I. Bekker (Bonn, 1829-55), Lib. VI
- Laurent, *Regestes* = V. Laurent, *Les Regestes des actes du Patriarcat de Constantinople*, vol. 1: *Les actes des Patriarches*, fasc. 4: *Les registres de 1208 à 1309* (Paris, 1971)
- ODB = A.P. Kazhdan et al eds., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, 3 vols. (Oxford, 1991)
- Pachymeres = Georges Pachymérès, *Relations Historiques: Edition, introduction et notes*, by A. Failler; *Traduction française*, by V. Laurent, vols. 1, 2 (Paris, 1984); *Edition, traduction française et notes*, by A. Failler, vols. 3, 4 (Paris, 1999)
- PLP = E. Trapp et al. eds., *Prosopographisches Lexikon der Palaiologenzeit*, 12 vols. (Vienna, 1976-94)
- REB = *Revue des Etudes byzantines*
- Talbot = *The Correspondence of Athanasius I Patriarch of Constantinople: Letters to the emperor Andronicus II, members of the imperial family, and officials*, ed. and tr. A.-M. M. Talbot (Washington, D.C., 1975)

<sup>1</sup> V. Laurent, 'Notes de chronologie et d'histoire byzantine de la fin de XIIIe siècle', *REB* 27 (1969), 209-28; idem, 'La chronologie des higoumènes de la Grande Laure Athonite de 1283 à 1309', *REB* 28 (1970), 97-110, at 101-2; *PLP*, no. 20679, s.v. 'Νίφων Γ'; *ODB*, s.v. 'Niphon' (A.-M. Talbot), etc.

がす重大な政治的脅威となった。問題の解決は、強権的な帝国統治を貫いたミカエルの時代には果たされず、ミカエルの長子アンドロニコス二世（在位一二八二 - 一三二八年）の治下、キジコス府主教のニフォンが総主教に就任してようやく実現した<sup>2</sup>。

ニフォンは深刻なシスマの解決者として、ビザンツ教会においてより積極的な記念の対象となりうる総主教であったが、彼がかかわった世界はそれを許さなかった。彼は一三四年、シモニアと神聖冒瀆の容疑で一部主教から告発され、教会会議において有罪と判断された結果、その職務を解かれた<sup>3</sup>。これが彼にとって意味したのは、いわゆる記憶の断罪、ダムナティオ・メモリアエであった<sup>4</sup>。九世紀以降のビザンツ教会には、聖像崇拜復活の記念日（受難節の最初の日曜日）に毎年朗読されるシノディコンなる典礼用文書があり、これには歴代総主教の名も同日の典礼で記念されるべく書き加えられていた<sup>5</sup>。ニフォンの名はこの文書に記載されなかったのである<sup>6</sup>。

実際に彼が有罪であったのか否かはともかくとして、総主教座から強制的に追放されたうえ、正教の主日における名の記念の機会を奪われたことは、ニフォン自身にとって痛恨の経験であったのは間違いないが、不名誉な記憶とともに余生を過ごさなければならなかった彼に、不幸中の幸いのように感じられるものがかりにあったとすれば、それは、正教会のダムナティオ・メモリアエが、正教のシノディコンのようなごく限定的な領野にしか及ばなかったことであろう。つまり、彼の名は様々なテキスト（いくつかは教会の壁面）に刻み込まれ、一三三〇年代と推定される彼の死を越え、今日まで残存しているのである<sup>7</sup>。

<sup>2</sup> このシスマに関する主要な文献は、V. Laurent, 'Les grand crises religieuses à Byzance : La fin du schisme arsénite', *Academie Roumaine. Bulletin de la section historique* 26 (1945), 252-84; P. Gounarides, *Τὸ κίνημα τῶν Ἀρσενιατῶν (1261-1310)* (Athens, 1991). 新たな解釈としては、D. Angelov, *Imperial Ideology and Political Thought in Byzantium, 1204-1330* (Cambridge, 2007), 366-416.

<sup>3</sup> Darrouzès, *Regestes*, no. 2027; V. Laurent, 'Notes de chronologie et d'histoire', 227-8. ニフォンに対する告発文は現存している。題目によれば、作者は高官のニケフォロス・クムノス、教会会議での告発者はニコメディア府主教とミティレネ府主教であった。Nikephoros Choumнос, *Ἐλεγχος κατὰ τοῦ κακῶς τὰ πάντα πατριαρχεύσαντος Νίφωνος*, ed. J.F. Boissonade, in *Anecdota Graeca*, vol. 5 (Paris, 1833), 255-83.

<sup>4</sup> ダムナティオ・メモリアエは古代ローマの慣行である。

<sup>5</sup> J. Gouillard, 'Le synodikon de l'Orthodoxie : édition et commentaire', *Travaux et Mémoires* 2 (1967), 1-316.

<sup>6</sup> ちなみにミカエル八世とアンドロニコス二世の治世に在位した総主教のうち、名を記載されているのは、アルセニオス、ヨセフ、アタナシオス、ゲラシモス、ヘサヤスであり、省略されているのは、ミカエル治世のニケフォロスとゲルマノス、アンドロニコス治世のキプロスのグレゴリオス、ヨアネス・コスマス、ニフォン、ヨアネス・グリキスである。Ibid., 103-5.

<sup>7</sup> 生前のニフォンへの最後の言及を含むのは、一三三〇年代にコンスタンティノーブルを訪

本稿の目的は、シスマの解決や教会会議での解任決議に関連して比較的多くの証拠が残っている総主教時代ではなく、断片的な証拠しかないそれ以前、とりわけキジコス府主教時代のニフォンの足跡を追い、彼がビザンツ末期の地域社会の中でどのような役割を果たしていたのか、そして彼の前に総主教位への道がどのように開かれたのかを明らかにすることである。

シスマの解決という歴史的な功績があるにもかかわらず、ニフォンの実像に迫ろうとしたビザンツ史家はほとんどいない。その生涯をビザンツ史の解明に捧げた被昇天アウグスティノ会士、ヴィタリアン・ローラン（一八九六 - 一九七三年）が晩年の一九六九年に発表した論文がもっとも詳細で、なおかつ唯一ともいえる研究であるが、ニフォンに関する議論は、一三世紀末のビザンツの年代と歴史を検討する覚書の一つを構成するにすぎない<sup>8</sup>。いまだ、ニフォンに関するモノグラフは書かれていないのである。後に続く研究者は現れなかったものの、ローランはニフォンの解任事件の政治的背景を検討し、事件が政治エリート層の党派対立と総主教の教会統治の方法の双方に起因している可能性を示唆した。ローラン自身がニフォンに注目したのはいわば必然であった。なぜなら、彼の中心的な研究対象はビザンツ末期、とくにミカエル八世とアンドロニコス二世の治世の教会史であり、かつてアルセニオス派のシスマについて、未刊行史料の校訂テキストを付した長大な論文を発表したことがあったからである<sup>9</sup>。シスマの解決者であるニフォンが、なぜ在位わずか四年で総主教座から追放されねばならなかったのか。これはシスマの研究者にとっては無

---

れたヴェネツィア貴族、マリノ・サヌード・トルセッロが記した一書簡（注二九を参照）。ニフォンの名の碑文が残る教会は、テッサロニキの聖使徒教会。J.-M. Spieser, 'Inventaires en vue d'un recueil des inscriptions historiques de Byzance : 1. Les inscriptions de Thessalonique', *Travaux et Mémoires* 5 (1973), nos. 20-22, pp. 168-70.

<sup>8</sup> V. Laurent, 'Notes de chronologie et d'histoire', 219-28. ローランは二〇世紀フランスのビザンツ研究の発展に大きく貢献した碩学の一人。その生涯に刊行した業績の数は、編著、論文、書評を合わせて五〇〇近くに及ぶ（編著はそのうち一四点）。Cf. 'Bibliographie du P. Vitalien Laurent', *REB* 32 (1974), 343-79 ; J. Darrouzès, 'Le père Vitalien Laurent', *REB* 32 (1974), v-xiv. 一八四五年にフランスのニームで創設された被昇天アウグスティノ会は、ビザンツおよび東方キリスト教の研究に力を入れ、一八九五年、同会附属のビザンツ研究所の前身であるオリエント研究所をイスタンブールに設立した。その目的は、正教会を含む東方キリスト教をカトリック教会の側から包括的かつ歴史的に理解することで、ローマ教皇を中心とする教会の再統一に寄与することであった。A. Failler, 'Le centenaire de l'Institut byzantin des Assomptionnistes', *REB* 53 (1995), 5-40.

<sup>9</sup> V. Laurent, 'Les grand crises religieuses à Byzance', 225-313. アルセニオス派に関するその他の論文に、'La question des Arsénites', *Hellenika* 3 (1930), 463-70 ; 'Les crises religieuses à Byzance : Le schisme antiarsénite du métropolit de Philadelphie Théolepte (+ c. 1324)', *REB* 18 (1960), 45-54 がある。

視できない問題であろう。

ニフォンに注目する学者がこれまで皆無に近かったとすれば、その主たる理由は、ローランのようなパレオロゴス朝初期の教会問題に特別の関心を寄せ、関係する史料に執拗に問いを発する歴史家が、学界の中にほとんどいなかったことである。逆に、ローランのような特異な関心と情熱の持ち主でなければ、ビザンツの数多いる教会人の中から、わざわざニフォンを選んで論じることはしなかったであろう。けれども、ニフォンが多くの学者に与えるであろう瑣末さの印象のほかに、彼らをニフォンから遠ざけるそれらしき理由がある。それは、ニフォンの前任者、コンスタンティノーブル総主教アタナシオス一世（在位一二八九 - 九三年、一三〇三 - 九年）の存在である。アタナシオスはビザンツ教会の歴史の中でもひととき異彩を放つ禁欲主義的改革者であり、アンドロニコス二世の信頼を得て総主教位に就くと、教会と社会に秩序を回復させ、それによって危機に瀕した帝国を救うべく、旧約の預言者や教父ヨアネス・クリュソストモス（コンスタンティノーブル総主教、三九八 - 四〇四年）をモデルとして様々な改革に着手した<sup>10</sup>。アタナシオスがラディカルな改革者であったことは、彼自身の書簡<sup>11</sup>、彼の総主教位を間近で目撃した高位聖職者ゲオルギオス・パキュメレスと高位聖職者を叔父に持つ在野の学者ニケフォロス・グレゴラスの歴史書<sup>12</sup>、そしてアタナシオスの死後に編纂された二つの聖人伝<sup>13</sup>など、複数の証拠が一致して示す。周辺の修道士と聖職者とでは評価は大きく異なったが、アタナシオスの総主教位が同時代人に鮮烈な印象を与えたのは確かである。アタナシオスの存在感は今日に

---

<sup>10</sup> アタナシオスに関する代表的な文献は、Talbot ; A.-M.M. Talbot, 'The Patriarch Athanasius (1289-93; 1303-09) and the Church', *Dumbarton Oaks Papers* 27 (1973), 7-33; J.L. Boojamra, *Church Reform in the Late Byzantine Empire: A study for the Patriarchate of Athanasios of Constantinople* (Thessaloniki, 1982); idem, *The Church and Social Reform: The policies of the Patriarch Athanasios of Constantinople* (New York, 1993); E. Patedakis, *Athanasios I Patriarch of Constantinople (1289-1293, 1303-1309): A critical edition with introduction and commentary of selected unpublished works* (D.Phil.Thesis, The University of Oxford, 2004)など。筆者の博士論文『コンスタンティノーブル総主教アタナシオスと末期ビザンツ帝国の危機』（京都大学、二〇〇六年度提出）は、アタナシオスの生と行いを当時の政治的コンテクストに位置づけることを目的にした伝記研究。

<sup>11</sup> 現在、タルボットとパテダキスの校訂によってカバーされているのは全体の三分の二程度である。Talbot; Patedakis, *op.cit.* Laurent, *Regestes* にはアタナシオスの全書簡の要約が収録されている。

<sup>12</sup> Pachymeres; Gregoras.

<sup>13</sup> Theoktistos the Stoudite, *Vita Athanasii*, ed. A. Papadopoulos-Kerameus, in: *Zapiski-istoriko-filologicheskago fakul'teta Imperatorskago S.-Peterburgskago Universiteta* 76 (1905), 1-51; Joseph Kalothetos, *Vita Athanasii*, in: *Ἰωσήφ Καλοθέτου Συγγράματα*, ed. D.G. Tsames (Thessaloniki, 1988), 453-502.

まで及んでおり、アタナシオスとニフォンの間にある研究蓄積の明らかな相違がそれを物語る。実際には現存する史料の量が格段に異なることも大きいわけであるが、アタナシオスの二度目の総主教位を継承したニフォンは、今日、最初の総主教位の継承者であるヨアネス・コスマス（在位一二九四 - 一三〇三年）と同様、アタナシオスほどラディカルな総主教ではなかったというそれだけの理由で、過小評価もしくは過分の無関心に甘んじているようにも見える。

とはいえ、ローランの研究以降、二人の研究者が別の主題を探究する過程でニフォンの重要性に気づいた。一人はアリス・メアリ・タルボット、もう一人はマーカス・ラウトマン、いずれも米国のビザンツ研究者である。まず前者についてであるが、彼女がニフォンに遭遇したのは、コロンビア大学の大学院生として、アタナシオスの未刊行書簡の校訂を進める過程においてであった。彼女は、アタナシオス書簡集の主要写本であるヴァティカン・ギリシャ語写本二二一九番（Codex Vaticanus Graecus 2219）<sup>14</sup>に含まれた何通かの書簡のタイトル部分に、ニフォンの名がキジコス府主教の職名とともに記載されていることに注目した<sup>15</sup>。書き手であるアタナシオスは本文中でニフォンの名にもキジコスの地名にも言及していないが、写本の制作に関与した何者かは、本文で話題にされている人物がニフォンその人であることをタイトルによって明示している。つまり、このタイトルは、アタナシオスとニフォンの関係を写本の読み手に対して開示する役割を果たしているのである。書簡から明らかになる両者の関係は、その他の史料には一切記録されていないものであった<sup>16</sup>。アタナシオスは、ある修道士からニフォンが神聖冒瀆をなしたとの告発を受けて、首都に滞在しているニフォンに対し速やかに裁判を実施することを望み、皇帝と一部の主教に、切迫した調子で協力を求めている。何らかの疑惑を招いた聖職者に対しては、総主

---

<sup>14</sup> この写本の特徴および内容については、Talbot, xxxiii-xxxvii; S. Lilla, *Codices vaticani graeci: codices 2162-2254* (Vatican, 1985), 212-24. 近年、ペレス・マルティンとパテダキスによって提起された仮説については、拙稿「コンスタンティノープルを遠く離れて——総主教アタナシオスの初期の書簡写本と近年の研究を概観する」『地中海研究所紀要』六号（二〇〇八年）と「ガレシオンの修道士アタナシオスとは何者か——パリ・ギリシア語写本八五七番とビザンツの修道院文化」『史林』九〇巻四号（二〇〇七年）、一一四頁を参照。

<sup>15</sup> Laurent, *Regestes*, nos. 1721, 1725 and 1731, and Appendix no. 12 (順に Talbot, nos. 89, 95, 105 and 113 に対応). Cf. Talbot, xxxvii.

<sup>16</sup> バキュメレスがそれに言及していないのは、彼が一三〇七年で記述を終了したためであろう。グレゴラスはアタナシオスとその試みをきわめて高く評価する一方で、ニフォンについては無知かつ強欲であったと辛辣に非難している。彼の二人の総主教に対する対照的な評価は、彼がアタナシオスの書簡集を史料に用いたことにも由来すると思われる。

Gregoras, 180-6, 259.

教がその他の主教らとともに教会裁判を開くのが慣例であったにもかかわらず、総主教がニフォンへの裁判を皇帝に重ねて要請しているという状況からは、皇帝が裁判の実施を何らかの方法で阻止していた可能性が浮かび上がる。タルボットは、ニフォンがアタナシオスの二度目の在位期の前半にコンスタンティノーブルにいた形跡がないことから、書簡の作成時期をアタナシオスの二度目の在位期の終盤と位置づけ、アルセニオス派問題と絡めて書簡の書かれた状況を解釈している。すなわち、アタナシオスがアルセニオス派に対して非妥協的態度を崩さないことに業を煮やした皇帝が、シスマの解決を実現させるべく、融和的な立場のニフォンを新たな総主教に据えることを画策し始め、これを察知したアタナシオスが疑惑を利用してニフォンの失脚、ひいては皇帝のシスマ勢力への妥協の阻止を図った、というのである<sup>17</sup>。

タルボットの解釈は政治的謀略を強調しすぎている観がなくもないが、皇帝政権の内部と同様に、教会の上層でも謀略が絶えなかったことを考えると、ありえない話ではない<sup>18</sup>。かりにタルボットの解釈が正しければ、ニフォンはアルセニオス派の問題をめぐる高度な政治的駆け引きの末に、非妥協的なアタナシオスに代わって、シスマを現実的に解決すべく総主教に選出されたことになり、ニフォンの解任には特定の政治的背景があったとするローランの解釈もいっそうの信憑性を帯びることになる<sup>19</sup>。いずれにしてもタルボットは、アタナシオスとニフォンはその政治的信条や教会観（エクレシオロジー）を異にはしても、ともに教会および帝国の高度な政治に深くかかり、ある時点で決定的に交差・対立したこと、また、両者の関係の正確な理解はアタナシオス研究にとっても不可欠であることを示したといえよう。

一方、ラウトマンはビザンツ末期のテッサロニキの教会建築を起点とする研究者である。彼は、テッサロニキ市内に位置し、今日、聖使徒ないし一二使徒の名で知られる聖堂の建築を博士論文の主題に選び、その後、テッサロニキおよびマケドニア地方に残るビザンツ時代の教会建築を広く検討した<sup>20</sup>。彼がニフォンに注目したのは、総主教時代の彼がテッサ

<sup>17</sup> Talbot, xxv-xxvi、およびタルボットによる四書簡（注一五）のコメンタリーを参照。

<sup>18</sup> たとえば、アタナシオスが二度の在位期に直面した謀略については、彼自身によるものを含め、いくつかの同時代証言がある。Talbot, nos. 113 and 115; Pachymeres, VIII, 20-21, pp. 181-89; Gregoras, VII, 258-9; Theoktistos the Stoudite, *Vita Athanasii*, 37-8.

<sup>19</sup> 教会会議で朗読されたであろう総主教ニフォンに対する告発文を、世俗の官僚ニケフォロス・クムノスが作成しているという事実は、クムノスを含め、ニフォンの失脚を狙う勢力が教会の内外に存在していたことを示唆する。

<sup>20</sup> M.L. Rautman, *The Church of the Holy Apostles in Thessaloniki: A study in early Palaeologan architecture* (Ph.D.Thesis, Indiana University, 1984); idem, 'Notes on the



ロニキと独特のかかわりを持っていたからである。教会建築についてみれば、ニフオンはすでに言及した聖使徒の聖堂と、同市内もしくは周辺にあったと思われるドブロソントス修道院のパトロンとしてその名を留めている<sup>21</sup>、教会行政についてみれば、府主教マラキアスをシモニアの容疑で解任した後、総主教代理を派遣して教区を直接の管轄下に置いている。ラウトマンは、このように様々な証拠から確認されるニフオンのテッサロニキに対する強い関心を、彼の来歴とラウラ修道院の発展に求めている。ニフオンはテッサロニキ近郊の都市ベロイアの生まれであり、キジコス府主教になる前には、テッサロニキ東方に位置するアトス山の大ラウラ修道院の院長を務めていた。一方、一三世紀末から一四世紀初頭にかけてラウラは経済的のみならず政治的にも発展し、同時期に連続して在位した二人のテッサロニキ府主教、ヤコボスとマラキアスは、いずれも過去、ラウラの院長を務めた経歴を有する修道士であった。このようにテッサロニキ周辺で長く暮らしたうえ、ラウラとともに暮らした二人の修道士がテッサロニキ府主教になるのを目撃したニフオンは、総主教としての自らの地位と権限をいかし、建築と行政の両面で、同市の宗教的パトロンになろうとした、というわけである<sup>22</sup>。ニフオンの活動と関心にその出自が深く関係していたことは、一三一二年、彼が皇帝の同意のもと、アトス山全体を総主教権威に直属させた一件からも示唆され、確実といってよいだろう<sup>23</sup>。

このようにローラン、タルボット、ラウトマンはそれぞれ異なる視角からニフオンの歴

---

metropolitan succession of Thessaloniki, c. 1300', *REB* 46 (1988), 147-59; idem, 'Patrons and buildings in late Byzantine Thessaloniki', *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 39 (1989), 295-315; idem, 'Observations on the Byzantine palaces of Thessaloniki', *Byzantion* 60 (1990), 292-306; idem, 'Ignatius of Smolensk and the late Byzantine monasteries of Thessaloniki', *REB* 49 (1991), 143-69; idem, 'Aspects of monastic patronage in Palaeologan Macedonia', in: S. Ćurčić and D. Mouriki eds., *The Twilight of Byzantium: Aspects of cultural and religious history in the late Byzantine Empire* (Princeton, N.J., 1991), 53-74.

<sup>21</sup> A. Dmitrievskij, *Opisanie liturgiĭeskikh rukopisej hranjasĭhsja v bibliotekah pravoslavnago vostoka*, vol. 3: *Typika*, II (Petrograd, 1917), 337; *Actes de Docheiariou*, ed. N. Oikonomidès (Archives de l'Athos, XIII; Paris, 1984), 211. この修道院の所在は不明であり、ジャンンの以下の地誌研究にも記載はないが、テッサロニキ市内か周辺に位置したことは確かである。R. Janin, *Les églises et les monastères des grands centres byzantins (Bithynie, Hellespont, Latros, Galèsios, Trébizonde, Athènes, Thessalonique)* (Paris, 1975).

<sup>22</sup> M.L. Rautman, 'Notes on the metropolitan succession', 153-4.

<sup>23</sup> Darrouzès, *Regestes*, no. 2014; *Actes de Prôtaton*, ed. D. Papachryssanthou (Archives de l'Athos, VII; Paris, 1975), no. 11, pp. 243-8, and 125-6; Dölger, *Regesten*, no. 2342; *Actes de Prôtaton*, no. 12, pp. 249-50. 拙稿「末期ビザンツにおける総主教と皇帝——アトス山の管轄権移行をめぐる」『史林』八四巻二号（二〇〇一年）、七二—一〇三頁も参照。

史的な意味を論じ、彼の活動が予想外の広がりを持つものであったことを明らかにした。他方で、彼らの研究がニフォンに関するさらなる問題を浮かび上がらせたのも事実である。筆者の目にもっとも重要な問題と映じたのは、一三一〇年の総主教就任以前、より正確に言えば、アタナシオスとの間に緊張が生ずるよりも前のニフォンの生活である。アタナシオスはなぜ疑惑の渦中にあるニフォンを裁判にかけることができなかったのか。それ以前になぜニフォンは、キジコス府主教というひとときわ高位の職務を授与されたのか<sup>24</sup>。また、彼のこの昇格と彼がかつてラウラ修道院長を務めた事実との間にはいかなる関係があるのか。これらの問いは単純ではあるけれども、彼の生活ならびに中央権威との関係を考慮に入れなければ、適切な解答を導くことはできない。考察を困難にするのは、総主教就任以前のニフォンに関する史料が、就任後のそれに比して極端に少ないことである。ことに彼の出生からラウラの院長になるまでの情報は皆無に等しい。つまり、総主教就任以前のニフォンを主題に、濃密かつ一貫した伝記を作成することは不可能である（就任後についても同様であろう）。したがって、本稿では、不可能な伝記を志向して現存する断片的な史料を逐一検討するのではなく、以下の二点に問題を限定したうえで、関係する史料およびその空白を注意深く読解する方法を選択する。一つは、総主教アタナシオスとニフォンの関係、ないしはアタナシオスの総主教在位期にニフォンがキジコス府主教として確認されることの意味である。かりにニフォンを府主教に選出したのがアタナシオスであったとすると、両者の関係は必ずしも当初から緊張をはらんでいたわけではなく、ある時点で何らかの理由で悪化した、ということになる<sup>25</sup>。もう一つは、ニフォンの地域社会における活動の実態である。確認できる限り、彼は出生から総主教に任じられるまで、ビザンツの地域社会を生活の場としていた。総主教となった彼のテッサロニキへの特別な関心が示唆するように、修道士として、そして主教として地域社会の中で生きた経験は、彼にとって大きな意味を持ったはずであり、彼を取り巻く種々の環境を視野に入れた上で、その意味を解き

---

<sup>24</sup> キジコス（今日のエルデク）はマルマラ海南岸に位置する、ヘレスポントス地方の中心都市。全般的な歴史と地誌については、F.W. Hasluck, *Cyzicus : Being some account of the history and antiquities of that city, and of the district adjacent to it* (Cambridge, 1910) を参照。ビザンツ教会の府主教座序列（タクシス）において、キジコスは、カイサレイア、エフェソス、トラキアのヘラクレイア、アンキラの後、第五の地位を与えられていた。J. Darrouzès, *Notitiae Episcopatum Ecclesiae Constantinopolitanae : Text critique, introduction et notes* (Paris, 1981) を参照。

<sup>25</sup> アタナシオスがニフォンを登用したと考える研究者は今のところ皆無である。V. Laurent, 'La chronologie des higoumènes', 101 ; Talbot, no. 89, commentary ad.app.1 (p. 418).

明かすことは不可欠であろう。

考察の順序について簡単にふれておけば、最初に、ニフォンの来歴と生活を伝える基本的な史料を概観し（第一章）、次いで、ニフォンの名が文中に現れるラウラ修道院宛ての証書に注目し、キジコス府主教となった彼の活動と関心の範囲が同地に限定されなかったことを示す（第二章）。ここまでのキジコス府主教時代のニフォンの活動の幅と性質を特定する作業であり、これの成果を踏まえた上で、ニフォンとアタナシオスの関係を二つの観点から問題にする。一つは、ニフォンの府主教選出の時期と経緯をめぐる問題であり、決定的な証拠を欠く状況ではあるものの、アタナシオスが彼の選出にかかわった可能性が強いことが示される（第三章）。もう一つは、アタナシオスの二度目の在位期終盤に生じたと思しきニフォンへの疑惑である。タルボットは、ニフォンがアタナシオスの後任総主教となってシスマを解決したという事実から演繹する形で、疑惑の政治的背景を推測したが、彼女の解釈は、キジコス府主教のニフォンの活動に照らしても妥当であるのか否か。当時のキジコスの置かれた状況にも配慮しながら検討を試みる（第四章）。

## 第一章 ニフォンの来歴と性格——同時代人の異なる評価

そもそもニフォンなる人物がなぜ、ラウラ修道院長、キジコス府主教、コンスタンティノーブル総主教を連続して務めたと判明するのか、その史料的根拠を確認しておきたい。ニフォンの来歴については、彼が歴代総主教に名を連ねたことによって、記述量自体は少ないながらも重要な報告がエフライムの『年代記』の中にある。

キジコスのニフォンは教区を変更され、女王たる都市の大祭司〔総主教〕となった。彼は修道士で、なすべきことにおいて鋭敏であり、一般的教育を欠いてはいたが、物事に通知性に溢れていた。彼は西方のペロイアを故郷とし、アトスにあるラウラの上長を務め、その後、キジコスの主教に、次いでかのコンスタンティヌスの都市の総主教に任じられた<sup>26</sup>。

---

<sup>26</sup> Ephraim, *Chronographi caesares*, in: J.P. Migne ed., *Patrologia graeca* 143, cols. 10367-76: 'Καὶ τόνδε λοιπὸν αὐθις ἀπειπαμένον, μεταθέσει δέδεικτο Κυζίκου Νίφων τῆς βασιλίδος ἀστέων ἀρχιθύτης· Ἄνὴρ μοναχὸς, ἀγχίνους ἐν πρακτέοις, παιδεύσεως μὲν ἀδαῆς ἐγκυκλίου, ἐπιβόλος δὲ καὶ φρενῶν πεπλησμένος, Βέρροισιν αὐχῶν τὴν δυτικὴν πατρίδα, Λαύρας ὑπάρξας προστάτης τῆς κατ' Ἀθῶν· Εἶτα κατέστη ποιμενάρχης Κυζίκου καὶ πατριάρχης τῆσδε Κωνσταντίνου.'

エフライムは『年代記』の著者としてしか知られていない人物である<sup>27</sup>。この作品では、歴代の皇帝と総主教の事跡が韻文形式で記述されている。エフライムが著述を行った年代や場所は不明であるが、皇帝の部の記述はミカエル八世パレオロゴスが首都を奪回した一二六一年で、総主教の部はヘサヤス（在位一三二三 - 三四年）が就任した一三二三年で終わっていることから、少なくとも総主教の部はヘサヤス就任から程なく完成した可能性が高い<sup>28</sup>。つまり、エフライムはニフォンの同時代人であったと考えられ、その記述は参照しえた記録資料のみならず、彼が直接見聞きした情報にももとづいているだろう<sup>29</sup>。実際、ニフォンに関するエフライムの記述は別の史料からも裏づけることができる。たとえば、ニフォンが文人的な教養を欠いていたことについては、すぐ後に確認するように、一四世紀の歴史家ニケフォロス・グレゴラスがエフライムと同様の証言を残している<sup>30</sup>。また、ニフォンの出身地とされるベロイアにある一教会には、ビザンツ暦六八二三年（西暦一三一四年九月から翌年八月まで）の年代を有し、総主教がそれを聖別したと伝える碑文（「総主教の手がこの教会を聖別する」）が残されており、この無記名の総主教は一三一四年四月に解

<sup>27</sup> Cf. *ODB*, s. v. 'Ephraim' (R.J. Macrides).

<sup>28</sup> たとえば、一二六〇年代から一三二〇年代にかけてというように、エフライムが数十年にわたって執筆を続けたとは想定しにくい。彼が皇帝の部を、皇帝ミカエルによるコンスタンティノーブル奪回の一二六一年で終えたのは、数々の宗教問題を生起させたミカエルの治世全体を書き記すのは適切でないという、政治的判断によるものと思われる。皇帝の部も総主教の部も、アンドロニコス二世の治世の後半、一三一〇年代から二〇年代にかけて執筆された、と考えるのが妥当であろう。テオドロス・スクタリオテスの作と伝えられる歴史書では、作者はそれ以降は余りにも多くのことが生じたと述べて、記述を一二六一年のコンスタンティノーブル奪回で終えている。Theodoros Skoutariotes, *'Ανωτίμου Σύνοψις Χρονική*, in: *Μεσαιωνική Βιβλιοθήκη*, ed. K.N. Sathas, vol. 7 (Athens, 1894), 555-6 と R. Macrides, *George Akropolites: The history* (Oxford, 2007), 65-71 を参照。

<sup>29</sup> マクリデスによれば、一二〇四年から六一年までの追放期に関して、エフライムは歴史家ゲオルギオス・アクロポリテスの史書にもっぱら依拠しているという。*ODB*, s. v. 'Ephraim' (R.J. Macrides). 一三二〇年代はニフォンがまだ存命中であったことが知られている。同年代後半、アンドロニコス二世と孫のアンドロニコス三世との間に帝位をめぐる内戦が生じたとき、ニフォンは明確にアンドロニコス三世を支持する態度を取っている。Gregoras, IX, 427-8. 一方、一四世紀前半、対トルコ人十字軍を画策していたヴェネツィア貴族のマリノ・サヌードは一三三三年頃、訪問先のコンスタンティノーブルでニフォンに面会したことを書簡に記している。サヌードによれば、ニフォンは教会合同の必要を説く彼に賛意を示したという。F. Kunstmann, 'Studien über Marino Sanudo den Älteren mit einem Anhang seiner ungedruckten Briefe', *Abhandlungen der historischen Classe der königlich Bayerischen Akademie der Wissenschaften* (Munich, 1855), 799-803 (Letter VI); A.E. Laiou, 'Marino Sanudo Torsello, Byzantium and the Turks', *Speculum* 45-3 (1970), 391.

<sup>30</sup> Gregoras, VII, 259.

任されたニフォンであると思われる<sup>31</sup>。

エフライムと同じく、ニフォンの総主教位を目撃した後に、彼について要約的な文章を記したのはグレゴラスである。一二九〇年前半に小アジアの都市、ポントスのヘラクレイアに生まれ、ニフォンの総主教時代には首都で生活していたと思われる彼は、ニフォンに対して非常に辛辣な評価を下している。その記述は以下のように始まる。

二年が経過した後、キジコス府主教のニフォンが総主教位に就いた。主教らは皇帝の希望に譲歩して、キジコスから総主教の座へと彼を押し上げた。この人には、普通では考えられないほど世俗の教養がなかったし、聖なる教養もなかった。彼は自らの手で紙面に文字を書くことすらできなかった。彼は教養を自らの指先でごくわずかに飲んだだけであり、それ以外ではその生来の才能に甘んじた。彼は生まれつき非常に賢明で才覚があり、もし学校で職を受け持っていたなら、きっと偉大なる教師に数えられたことであろう。けれども彼を支配したのは、金銭欲であり、低俗な功名心であり、世俗の名声への渴望であった。これらは彼の生来の賢さすべてを働かせ、いわば日夜起こる引き潮のように、彼の関心すべてを吸収した<sup>32</sup>。

<sup>31</sup> 引用の原文は、‘πατριαρχική χεὶρ καθιστᾷ τὸν ναόν’. Darrouzès, *Regestes*, no. 2018; R. Cormack, *Byzantine Art* (Oxford, 2000), 197. 教会の碑文がほかに明らかにする情報はおおむね以下のとおり。教会の建立に着手したのはクセノス・プサリダスなる人物で、完成を見届けたのは彼の妻のエウフロシュネ。画家たちの姓はテッサリア地方において著名なカリエルゲス。なお碑文中の動詞はすべて現在形である。ビザンツ暦六八二三年という年代だけ見れば、一三一四年四月に解任されたニフォンではなく、一三一五年五月に就任したヨアネス・グリキスが教会の聖別をおこなったと判断できるが、すべての動詞が現在形であることから、建設が完了して碑文が刻まれたのが六八二三年であって、総主教による聖別がそれ以前になされた可能性もある。ダルゼは、ニフォンが教会会議によって解任されたことが、碑文でニフォンの名が省略される原因になったと推測している。Darrouzès, *Regestes*, no. 2018, note. 実際、教会を聖別した総主教の名が碑文で言及されないのは不自然であり（皇帝アンドロニコスの名への言及はある）、かりにニフォンの後任、ヨアネス・グリキスが聖別者であった場合、ヨアネスの名が記されていたはずである。筆者はダルゼの見解を現時点でもっとも妥当なものと考え、同郷人であるニフォンに愛着を抱くパトロン、あるいは画家が、実際の聖別者であるグリキスの名を省略することで、碑文の読み手（大半はペロイアの住民であったはずである）にニフォンを想起させようとした可能性もある。

<sup>32</sup> Gregoras, VII, 259. 実際、アタナシオスの退位（一三〇九年九月）からニフォンの就任（一三一〇年五月）までの間隔は約八ヵ月であり、グレゴラスの伝える二年は誤りである。この単純な誤りは、当時、グレゴラス少年がコンスタンティノーブルではなく、郷里のヘラクレイアに暮らしていたことを強く示唆する。おそらく彼はニフォン在位期のある時点でコンスタンティノーブルに移住し、コーラ修道院に定着した。この問題については、I. Ševčenko, ‘Metochites and the intellectual trends of his time’, in: P. A. Underwood ed.,

以上のグレゴラスの記述にはエフライムのそれと明らかに共通する点がある。それは、ニフォンが無教養である反面、賢明ないし鋭敏な人物として提示されていることである。世界が違えば、偉大な教師の仲間入りを果たす可能性もあったというグレゴラスの評は、ニフォンの生来の賢明さに対する賛辞ととれなくもない。しかし、肯定的な言辞があるとなればこれくらいであり、引用箇所以降も露骨な批判が延々と続く。彼は経済的な物事に並外れて通じており、女性の宗教的な場所（τῇ γυναικωνίτιδι）に多大な関心を寄せ、地位と能力ある人々の前では社交的に振る舞う一方、内では嫉妬と憎悪の感情をたぎらせ、彼らの悪口を何ら躊躇することなく皇帝に語って聞かせた。グレゴラスはニフォンをリビアの砂漠に生息する毒蛇になぞらえ、その毒舌を締めくくっている<sup>33</sup>。こうしたグレゴラスの記述の中には、総主教になる前のニフォンに関係すると思しき情報が含まれている。一つは、彼の経済的な物事、グレゴラス言葉を借りれば、「植樹、ブドウ栽培、建築業、手短にいうなら、穀倉とブドウ酒貯蔵庫を満たし、財布を破裂させるものすべて」<sup>34</sup>への関心である。これらは、ニフォンの贅沢な生活への志向とも、宗教組織の財政を充実・安定化させる努力とも解することができるが、かりに後者がより現実的であるとすれば、ニフォンが総主教になる前にラウラ修道院長とキジコス府主教という二種の指導者的職務を経験していることと深く関係しているだろう。もう一つは、彼の女性の宗教的な場所、すなわち女子修道院への関心である。グレゴラスはニフォンが女性を性的欲望の対象と見ていたとは記さないが、彼があたかも必要不可欠なことをするかのように長時間、女性の場で過ごし、その結果、ペルゼおよびクラタイウの二つの女子修道院を管理することになったと伝えている<sup>35</sup>。後に詳細に検討するが、彼が総主教就任以前に女性の霊的指導をしていた証拠はほかにもあり、二つの女子修道院の管理を受け持ったのがキジコス府主教時代であることもほ

---

*The Kariye Djami*, vol. 4: *Studies in the art of the Kariye Djami and its intellectual background* (London, 1975), 90-1 (Appendix III: When did work on the Chora's restoration begin?); H.-V. Beyer, 'Eine chronologie der Lebensgeschichte des Nikephoros Gregoras', *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 27 (1978), 138 を参照。

<sup>33</sup> Gregoras, VII, 259-61. グレゴラスに先行する歴史家パキュメレスは、その作品においてアタナシオスの取り巻きの修道士らをサソリになぞらえている。Pachymeres, VIII, 16, pp. 165-7.

<sup>34</sup> Gregoras, VII, 259.

<sup>35</sup> Gregoras, VII, 260. この二つの女子修道院については、R. Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin, p. 1, Le siege de Constantinople et le Patriarcat oecuménique, t. 3: Les églises et monastères* (2<sup>nd</sup> ed., Paris, 1969), 396-7 (ペルゼ) and 510-1 (キリスト・トゥ・クラタイウ)を参照。

ば確実である。

このように、いずれもニフォンが総主教座から去った後に執筆ないし作品を完成させたエフライムとグレゴラスの記述にもとづき、ニフォンの基本的な来歴と性格を確認したところで、ニフォンがラウラ修道院長およびキジコス府主教の地位にあったことを証するいくつかの史料に目を向け、その時点でのニフォンの状況を探ってみよう。キジコス府主教の地位に関しては、エフライムやグレゴラスよりも早くに執筆し、ニフォンについて彼らよりもはるかに多くのことを知っていたに相違ないパキュメレスの歴史書を取り上げる。

ラウラ修道院長としてのニフォンについては、アトス山文書集が重要な手がかりを供する。院長ニフォンへの言及を含むのは、一二九四年一月にプロトス（アトス山の首長）のヨアニキオスがヒランドル修道院に対して発行した一通の証書である<sup>36</sup>。ヒランドルとスコルピウ修道院の所領問題に関するプロトスの裁決が記された証書の署名リストにおいて、ニフォンはプロトスに次いで、「(十字) 尊崇すべき帝国大ラウラの修道院長ニフォン、修道司祭 (十字)」<sup>37</sup>と自筆で記している。残念ながらニフォンがラウラの上長であったことを示す証書はこれ以外には伝わっていない。この証書だけでは、ニフォンがいつ修道院長に就任したのかも、いつまで在位していたのかも知りようがない。ニフォンの在位以前では、後にテッサロニキ府主教となったヤコボスが一二八八年八月付けのヒランドルの証書に現れるのが最後で、その後は誰も言及されない<sup>38</sup>。別稿で考察したとおり、ヤコボス是一二八九年のアタナシオスの総主教就任にともなってテッサロニキ府主教に選出された可能性が高い<sup>39</sup>。となれば、移動したヤコボスの後任にニフォンが選ばれた可能性もあるが、ニフォン以前に記録のない第三の修道院長が在位していた可能性も否定できない。おそらく新史料が発見されない限り、一二九四年一月以前のアトスでのニフォンの動向を把握することは不可能であろう。ただし、由緒あるラウラで院長を務めているという事実から、彼が新参の修道士ではなく、ラウラで長い年月を過ごし、ある程度の年齢に達した修道士とみなしてもあながち間違いではあるまい<sup>40</sup>。

<sup>36</sup> *Actes de Chilandar, I: des origines à 1319*, ed. M. Živojinović et al. (Archives de l'Athos, XX ; Paris, 1998), no. 14.

<sup>37</sup> *Ibid.*, no. 14, p. 157: ‘+ Ὁ τῆς σεβασμίας βασιλικῆς μεγάλης Λαύρας καθηγούμενος Νίφων ἱερομόναχος+’.

<sup>38</sup> *Ibid.*, no. 11, p. 143.

<sup>39</sup> 拙稿「総主教アタナシオスと二人のラウラ修道院長——聖山と教会を結ぶ道」『西洋史学』二二三号（二〇〇六年）、二二 - 四三頁、とくにヤコボスを集中的に検討した第一章（二五 - 三六頁）を参照。

<sup>40</sup> パテダキスによれば、アトス山内にニフォンがかつて隠者として暮らしたと伝えられる

視線を一二九四年十一月より後に移せば、彼はいつラウラを離れ、キジコス府主教に就任したのか。アンドロニコス二世の治世初期にキジコス府主教であったことが確認できるのは、テオドロス・スクタリオテスおよびダニエル・グリキスである<sup>41</sup>。前者は教会合同を積極的に支持した聖職者の一人であり、彼を重用した皇帝ミカエルが一二八二年暮れに没して程なく、首都内のプロドロモス修道院に自発的に退いた<sup>42</sup>。その後、総主教グレゴリオス二世から新たなキジコス府主教に任じられたのが後者、グリキスである。彼は府主教選出時、ビティニア地方の修道院に暮らす修道士であり、総主教グレゴリオスの知友でもあった。グリキスの姓は、彼が文官や学者を輩出した名家の一つ、グリキス家の出であったことを示唆する。ところが彼は総主教グレゴリオスの在位期後半、仲間のエフェソス府主教ヨアネス・ケイラスとともに総主教の神学的立場に反対する党派を形成し、最終的に総主教を辞任へと追い込んだ。パキュメレスは、一二八九年のグレゴリオス辞任後、皇帝が教会の秩序を乱したケイラスに聖務停止の処分を下したと伝えている<sup>43</sup>。パキュメレスによる言及はないものの、グリキスはケイラスとともに反グレゴリオス派の中心メンバーであったことから、同じ時期に聖務停止もしくはそれに類する処分を受けていた可能性が高い。

問題となるのは、このグリキス以降の府主教である。正教のシノディコンには総主教のリストのほか、テッサロニキやアドリアノーブルなど一部都市の府主教のリストが記載されているが、キジコス府主教のリストは含まれていない。また、府主教の名を確認するうえで、総主教座文書の署名リストも重要な証拠となりうるが、一二九〇年代と一三〇〇年代に発行された総主教座文書の中にキジコス府主教の名を確認することはできない<sup>44</sup>。限られた史料をもとに、グリキスの後任と一般に推測されているのは修道士メトディオスであ

---

洞窟があるという（二〇〇八年一月三日、ダンバートンオークスでの会話）。

<sup>41</sup> *PLP*, no. 4263.

<sup>42</sup> スクタリオテスは主要な合同支持派として逮捕される予定であったが、首都のプロドロモス修道院に自主的に退き、それによって逮捕を免れていた。*Pachymeres*, VII, 17; *PLP*, no. 26204. なお、マクリデスは、スクタリオテスが隠退先の修道院で歴史書を執筆したと推測している。*R. Macrides, op.cit.*, 70-1.

<sup>43</sup> *Pachymeres*, VIII, 8. この事件については、A. Papadakis, *Crisis in Byzantium: The Filioque controversy in the patriarchate of Gregory II of Cyprus (1283-1289)* (rev. ed., Crestwood, N. Y., 1997), 181-200 も参照。

<sup>44</sup> 総主教座文書、とりわけ教会会議の決議文書は、ヨアネス・グリキス（在位一三一五 - 一三一九年）が総主教に就任した一三一五年から一五世紀初頭まで、写本の形で体系的に保存された。これら文書の大半には会議に参加した府主教のリストが含まれている。一方、一三一五年以前の文書は断片的にしか残っていないため、同年以前の府主教の構成および変動を正確に把握することは不可能である。*J. Darrouzès, Le registre synodal du Patriarcat byzantin* (Paris, 1971)を参照。



る。メトディオスのキジコス府主教在位を裏づけるのは、一二八〇年代後半に彼が総主教グレゴリオスへ宛てた書簡の写本に、匿名の写字生が付記した説明文のみである<sup>45</sup>。写字生は読み手に対し、書簡の書き手は後にキジコス府主教を務めた修道士のメトディオスであると明かしている。書簡の文面からは、メトディオスが総主教グレゴリオスのかつての学友であったこと、さらには一時期、合同支持派に与していたグレゴリオスとは異なり、彼が一貫して合同反対派であったことが判明する。しかしいうまでもなく、文面はメトディオスの将来には決して言及しない。総主教グレゴリオスに対する反抗の責任を問われたグリキスが解任されるか、辞任するかした後、合同反対派の修道士であったメトディオスが選出されたとするのがもっとも自然な推量であろう。ただし、これがアタナシオスの一度目の在位期であるのか、それとも後任のヨアネス・コスマスの時代であるのかは判然としない<sup>46</sup>。教会内部の動向に通じていたパキュメレスも、メトディオスについては何も伝えていない。思うにこうした証拠の乏しさは、メトディオスの在位がごく短期間であったことを示している<sup>47</sup>。

一方、キジコス府主教としてのニフォンの存在ないし活動にいち早く注目したのはパキュメレスである。すでに何度も言及されたパキュメレスは高位聖職者として大教会に勤務する傍ら、学者としても活動した人物で、様々な分野に及ぶ浩瀚な著作を後代に残した<sup>48</sup>。中でも彼の歴史書はミカエル八世とアンドロニコス二世の治世に生じた諸事件のきわめて詳細な記述を含み、パレオロゴス朝初期の歴史を学ぶための基本史料である。教会史家にとって好都合なのは、彼がエリート聖職者としての自意識を隠すことなく、教会をめぐる問題に多くの紙幅を割いていることである<sup>49</sup>。他方で残念な点は、十分詳細であるとはいえ、

<sup>45</sup> V. Laurent and J. Darrouzès eds., *Dossier grec de l'Union de Lyon (1273-1277)* (Paris, 1977), 91-2 (introduction), 518-27 (text), esp. 91 and 519.

<sup>46</sup> 書簡の編者は一二八九年の選出と断定しているが、根拠は提示していない。 *Ibid.*, 91.

<sup>47</sup> シェイネーはフェダルトの著書 (G. Fedalto, *Hierarchia ecclesiastica Orientalis*, I and II [Padua, 1988]) を参照し、一三〇〇年にニケタス・カップドケスなるキジコス府主教が存在したとし、ニフォンの在位時期を一三〇三年から一〇年に置いている。フェダルトの典拠を確認できなかったため、本文中でカップドケスには言及していない。J.-Cl. Cheynet, 'L'époque byzantine', in : B. Geyer and J. Lefort eds., *La Bithynie au moyen âge* (Paris, 2003), 335.

<sup>48</sup> Cf. S. Lampakis, *Γεωργίος Παχυμέρης Πρωτέδικος καὶ Δικαιοφύλαξ, εἰσαγωγικό δοκίμιο* (Athens, 2004), 21-38 ; P. Tannery, *Quadrivium de Georges Pachymère* (Vatican, 1940), esp. V. Laurent, 'Preface', vii-xxxiii.

<sup>49</sup> Cf. A. Failler, 'La promotion du clerc et du moine à l'épiscopat et au patriarcat', *REB* 59 (2001), 125-46 ; S. Lampakis, *op.cit.*, 39-134 ; H. Hunger, *Die hochsprachliche profane Literatur der Byzantiner*, vol. 1 (Munich, 1978), 447-53.

その歴史書が可能な限り多くの情報を盛り込んだ百科事典のような作品ではないこと、つまり、パキュメレスが彼なりの基準で情報の取捨選択を行っていることと、彼がおそらくは物理的な理由で作品を完成することができなかったこと、彼が想定していた記述の終点よりも先に彼の人生の終点が到来したことである<sup>50</sup>。パキュメレスは職業柄、ニフォンの来歴について多くを知っていたであろうが、彼がベロイア出身であったことにも、過去にラウラ修道院で暮らし、院長を務めたことにも言及していない<sup>51</sup>。また、歴史記述の終点および作者の死期と関係していることであろうが、アタナシオスが追及したニフォンの疑惑への言及もない。実際、パキュメレスがニフォンについて言及するのは一度だけであり、その記述はエフライムのそれと同程度に簡略である。にもかかわらず、この記述は以下の二つの点で決定的に重要である。一つは、それが、ニフォンの府主教位の確認可能なもっとも早い年代（いわゆる *terminus a quo*）を指し示すこと、もう一つは、それが、アタナシオスの総主教復位直後の小アジアの情勢に関する一連の記述の中に配置されていることである。小アジアの北西、ビティニア地方のトルコ人勢力の台頭に関連して<sup>52</sup>、パキュメレスは以下のように記している。

そしてペルシャ人〔トルコ人〕は至る所に侵入し、人々を刃にかけた。一方、逃げることに成功した人々は、ちょうどそのとき同市の主教のニフォンによって組織されたキジコスの要塞に立てこもり、女性や子供、家畜や財産を要塞内に避難させた。この人は精力的で、実際の物事に関しても宗教的な物事に関しても知恵を備えていた<sup>53</sup>。

<sup>50</sup> ニフォンが言及される箇所、彼のその後の総主教就任が暗示も明示もされていないことから、一三一〇年五月よりも前に、作品の継続を不可能にする事態がパキュメレスに生じたのかもしれない。

<sup>51</sup> パキュメレスが大教会で受け持った職務は、年代の早い順に、ノタリオス（書記）、ディダスカロス・トゥ・アポストル（使徒教師）、プロテクディコス（聖職者法廷長官）。

<sup>52</sup> 程なくビティニア地方ではオスマンの国家が成立することになる。パキュメレスの史書には、オスマンの名が「アトマン」*Ἀτμᾶν*として現れる。Pachymeres, X, 20, p. 347 and 25, p. 359, and XI, 9, p. 425. Cf. A. Failler, 'Les émirs turcs à la conquête de l'Anatolie au début de 14<sup>e</sup> siècle', *REB* 52 (1994), 69-112.

<sup>53</sup> Pachymeres, XI, 11 (p. 427, ll. 4-10): 'Καὶ τὸ Περσικόν, πολλαχόθεν ἐπεισβαλόντες, τοὺς μὲν ἔργον καθιστᾶσι μαχαίρας, ὅσοι δέ γε καὶ ἴσχυσαν ἐκφυγεῖν, τῷ τῆς Κυζίκου ἐπιτειχισμῷ, ἄρτι τότε συστάντι παρὰ τοῦ ἐν αὐτῇ προέδρου Νίφωνος, ἀνδρὸς δραστηρίου καὶ γνώσεως ἐπηβόλου καὶ οὐ μᾶλλον πνευματικοῖς ἢ κοσμικοῖς τρίβωνος πράγμασι, φέροντες ἑαυτοὺς, καὶ γυναῖκας καὶ τέκνα καὶ ζῶα καὶ ὑπαρξιν ἐγκατέκλεισαν.'

エフライムが『年代記』の総主教篇を執筆した際、史料としてパキュメレスの歴史書を参照したことは十分考えられる。両者のニフォンに対する評価および文章表現は近似している。

ニフォンに率いられたキジコスの人々が、トルコ人の攻撃から身を守るために要塞内に避難したというこのエピソードは、実際にはいつ生じたのか。パキュメレスは編年的な記述と人物や事件を中心とした記述を織り交ぜているので、年代の特定には注意を要する。けれども前後の記述から、一三〇三年六月二三日のアタナシオスの再度の総主教就任より後に発生した事件であることは確実である。その決定的な証拠となりうるのは、引用文の直前に、一部専門家の間ではつとに有名な記述が置かれていることである<sup>54</sup>。

したがって、以下のことが時代と現状にとって必要な唯一の方策と思われたのである。すなわちそれは、その地にいる人々、つまりは、プロノイアにおいて修道院や教会、皇帝軍に配属されている人々を彼らの主から解放した後、隠者を除く彼らすべてを軍隊に統合し、彼らがその地に留まって自分たちの財産のために戦うようにすることである。実際、オリーブの若枝が総主教から大王へ無言で送られた。皇帝は彼〔アタナシオス〕に全幅の信頼を置いていたので、一つの良策を実行できると確信した。しかし、それは単なる計画の域を出なかった。というのも、その実行を命じられた人々がいまだ到着していなかったからである<sup>55</sup>。

<sup>54</sup> かつてビザンツのプロノイア制が帝国社会の漸次的封建化の証左と一部学者からみなされ、国際学界で活発な討議が行われた際に、パレオロゴス朝期のプロノイア制の実態と皇帝による改革企図を示す証拠として、パキュメレスの記述が注目を集めた。Cf. E. Fisher, 'A note on Pachymeres' *De Andronico Palaeologo*, *Byzantion* 40 (1970), 230-5; A.E. Laiou, *Constantinople and the Latins: The foreign policy of Andronicus II, 1282-1328* (Cambridge, Mass., 1972), 120; J.L. Boojamra, *The Church and Social Reform*, 47-50. プロノイア制の性質と変化については、G. Ostrogorsky, *La féodalité byzantine* (Bruxelles, 1954)および A. Kazhdan, 'Pronoia: The history of a scholarly discussion', in: B. Arbel ed., *Intercultural Contacts in the Medieval Mediterranean* (London, 1996), 133-63 を参照。パレオロゴス朝期に関しては、プロノイアは西欧の封土に匹敵するものというよりはむしろ、軍隊を維持するための財務上の工夫であることがバルトゥシスによって示された。M.C. Bartusis, *The Late Byzantine Army: Arms and society, 1204-1453* (Philadelphia, 1992); idem, 'On the problem of smallholding soldiers in late Byzantium', *Dumbarton Oaks Papers* 44 (1990), 1-26.

<sup>55</sup> Pachymeres, XI, 11 (p. 425, l. 23 - p. 427, l. 4): 'Καὶ διὰ ταῦτα ἐν τῶν ἀναγκαίων ἔδοξε τῷ καιρῷ καὶ τοῖς ἐφεστῶσι πράγμασι· τὸ περιλειφθέν τέως, ὅσον ἐν προνοίαις ἐτάττετο μοναῖς τε καὶ ἐκκλησίαις καὶ τοῖς βασιλεῖ παρασπίζουσιν, ἀφεικότας τῶν δεσποτῶν, τάττειν εἰς στρατιωτικόν, πλὴν καὶ μονοκελλικόν ξύμπαντας, ὡς ἐντεῦθεν αὐτοὺς ἐκείνους ὑπὲρ τῶν ἰδίων προσμένοντας μάχεσθαι. Ἐστέλλετο γὰρ καὶ παρὰ πατριάρχου θαλλὸς ἐλαίας ἀναυδήτως τῷ ἄνακτι· ὅθεν καὶ τι θαρρεῖν εἶχε τῶν ἀγαθῶν ἐκ τῆς περὶ αὐτόν οἱ μεγίστης πληροφορίας. Τὰ δ' ἦσαν ἐν μόναϊς βουλαῖς· οὕτω γὰρ ἐφίσταντο οἷς ἦν ἐπιτεταγμένον ταῦτα πράττειν.'

ライウは、改革の内容を皇帝によるプロノイア再分配（少数の大プロノイア保有から多

この記事が著名であるのは、皇帝アンドロニコスが帝国軍の再編のために、修道院や教会などが保有するプロノイアの没収を企図したことを伝えているからである。トルコ人勢力によるビザンツ領攻撃が激化する中、既存のプロノイアを没収し、領主的な人々の下にいる農民やその他の人々にそれを再分配することによって、つまり徴税権の再分配というインセンティブを用いて軍隊を強化しようと皇帝は考えた。これに対して、総主教アタナシオスはオリーブの若枝を送るという行為によって、是認の意志を皇帝に示した。しかし、プロノイアを通じたビザンツ軍の再編は、トルコ人勢力が当該地域の大半を席卷したため実現することはなかった。キジコス住民の要塞への避難は、こうした状況下で生じており、アタナシオスの総主教就任が時期的に先に来ることは疑いない。

それではキジコス住民の退避そのものはいつ生じたのか。パキュメレスはそれを「全般的荒廃と避難について」と題する節（一章九節）において、具体的な年代を明示せずに述べているので、この節の記述のみからでは、それがアタナシオスの総主教就任後に生じたことは確認できても、両出来事の間にはどの程度の時間的隔たりがあったのかは判然としない。このクロノロジーの問題に関しては、パキュメレス自身の記述のほかに、パキュメレス研究の第一人者アルベール・ファイエの論文が参考になる<sup>56</sup>。ファイエは一三〇二年から翌年にかけて行われた共同皇帝ミカエル九世パレオロゴス（アンドロニコス二世の長男）の小アジア遠征に焦点を合わせ、関連する事件のクロノロジーを詳細に跡づけている。

ミカエルは一三〇二年、過ぎ越し祭の四月二二日頃、主にコーカサス地方出身のアラン人傭兵からなる一軍を率いて首都を発し、小アジア西部のマグネシアへ向かう。ミカエルは防衛体制を強化すべくマグネシアに滞在するも、アラン人傭兵の逃亡が相次いだため、十分な戦果を挙げることができないまま同地の防衛を断念、一三〇二年から翌年にかけての冬、北進しペルガモンに至る。一三〇三年春、彼はより確実な軍事拠点求めて再び北上し、夏頃にアドラミティオンに到達。その後、トルコ人に包囲されたキジコスを解放すべくマルマラ海岸方面に進むも、彼らと交戦することは避け、八月頃、キジコスの西方に位置する海港都市ペガイ（現カラビガ）に駐留する。ペガイ到着から程なくミカエルは行軍の疲れから重病を患う。その病状は医者も見放すほど深刻なものであったが、まもなく

---

数の小プロノイア保有への試みと解釈しているが、筆者もこれが妥当な解釈であろうと考える。A.E. Laiou, *Constantinople and the Latins*, 120.

<sup>56</sup> A. Failler, 'Chronologie et composition dans l'histoire de Georges Pachymères (livres VII-XIII)', *REB* 48 (1990), 44-53.

彼は奇跡的に回復する。パキュメレスはミカエルの発病と回復という一連の事件の少し前、具体的には八月八日に大地震が生じたと報告しているので、ミカエルのペガイ到着と発病は八月中旬ないしは下旬頃に位置づけることができる。

ちなみにミカエルはその後もペガイに留まり、父帝アンドロニコスからの命令を受けて、一三〇四年一月二四日に首都に帰還した。ミカエルによるキジコスの救援が不首尾に終わったことを受け、一三〇三年九月、アンドロニコスはシチリア島から到来したロヘール・デ・フロール（ルトガー・フォン・ブルム）率いるカタロニア傭兵団を雇用し、キジコスに派遣した。同年秋、彼らはキジコスを攻囲していたトルコ人勢力の撃破に成功した<sup>57</sup>。

アタナシオスの総主教復位が一三〇三年六月二三日であり、一方、ミカエルの軍団がペガイに到着したのが八月後半頃、さらに皇帝がアタナシオスの同意を得て企図した軍隊の再編が時間的に間に合わなかったとするならば、キジコス住民の避難は七月半ばから後半にかけて行われたと考えるのがもっとも妥当であろう。小アジア西部におけるトルコ人勢力の攻撃が苛烈なものとなり、ヘレスポントス地方のキジコスの周辺住民にも危機が迫った「ちょうどそのとき」、ニフォンはすでに府主教としてキジコスにいた。ここでは「ちょうどそのとき」がアタナシオスの復位よりも数週間ないし約一ヵ月後であることを確認して、キジコス府主教のニフォンに言及する別の史料の考察に移る。

## 第二章 ラウラ修道院の証書

その史料は一三〇四年八月一七日に作成されたラウラ修道院宛ての証書であり、一人の貴族女性によるラウラへの財産寄進を内容とする<sup>58</sup>。パンセバストス・セバストスと皇帝のオイケイオスの称号をあわせ持つデメトリオス・スパルテノスの娘、マリア・アンゲリナは、夫ドゥーカス・ミカエル・アンゲロスの死後、夫がファルマケス家出身の前妻から継承していたハルキディキ半島内の土地（ハギア・マリア）を、亡くなった夫の名の記念と引き換えに、修道司祭マクシモスとゲルマノスがそれぞれ院長と理事長（メガス・オイコノモス）を務めるラウラ修道院へ寄進することを欲した。この寡婦となったマリアがラウラへ寄進を行うに際して、同意を与えたと証書に記されているのが、「至聖にして榮譽ある

<sup>57</sup> Ibid., 53-61. ビザンツにおけるカタロニア傭兵団の活動については、Pachymere, XI, XII, XIII; Ramon Muntaner, *The Chronicle of Muntaner*, II, tr. Lady Goodenough (London, 1921), 480ff; A.E. Laiou, *Constantinople and the Latins*, 158-99などを参照。

<sup>58</sup> *Actes de Lavra*, II: *de 1203 à 1328*, ed. P. Lemerle et al. (Archives de l'Athos, V: Paris, 1977), no. 98, pp. 138-41 (text).

キジコス府主教にして全ヘレスポントス管区長のニフォン」<sup>59</sup>およびマリアの実父、デメトリオス・スパルテノスである。この証書にニフォンがキジコス府主教として言及されていることは、彼が一三〇三年七月頃に同市の主教であったという先に確認した事実と年代的には矛盾しない。しかし、なぜキジコスの地にいるはずのニフォンが突如この証書に現れているのであろうか。この証書の内容からはキジコス府主教に就任する以前のニフォンとその周囲の状況がおぼろげながらも浮かび上がってくる。

スパルテノス家出身の寄進者マリア・アンゲリナについてはこの証書しか言及がない。彼女が後妻として結婚したドゥーカス・ミカエル・アンゲロスも同様である。しかし両者の名からは、彼らがギリシャ北部に政治権力を有した名門アンゲロス家に連なっていたことが読み取れる。マリアが自らの姓を旧姓スパルテナではなく、アンゲリナとしていることももちろん重要な証拠ではあるが、それ以上に重要なのは、亡き夫の名である。彼の氏名を構成する三つの固有名詞のうち、名（いわゆるファーストネーム）がミカエルであることは明らかである。それではミカエルの前に置かれたドゥーカスの名は何を意味するのかという問題が生じるが、これはそれほど難しい問題ではない。というのも、アンゲロス家はコムネノス朝期に、同じく名門のドゥーカス家と婚姻を通じて関係を深め、アンゲロス家の一員はときにドゥーカスの姓を名乗ったり、あるいは他からドゥーカスと称されたりしたからである<sup>60</sup>。たとえば、コンスタンティノス・アンゲロスとテオドラ・コムネナの子ヨアネスは、父親の姓が優先されるならアンゲロスと呼ばれるところ、ドゥーカスの姓で呼ばれている<sup>61</sup>。また、このヨアネスとゾエ・ドゥーカイナの間に生まれたテオドロスは自らの姓をコムネノス・ドゥーカスと称していた<sup>62</sup>。テッサロニキを首都に自らの国家を形

<sup>59</sup> *Ibid.*, 138: ‘τοῦ τε πανιερωτ(ά)του μ(ητ)ροπολίτ(ου) Κυζίκου ὑπερτίμου (καὶ) ἐξάρχου παντός Ἑλλησπόντ(ου) κῦ(ρ) Νίφωνο(ς)’.

<sup>60</sup> テオドラ・コムネナは皇帝アレクシオス一世コムネノスとエイレネ・ドゥーカイナの娘であったので、コンスタンティノスとテオドラの婚姻によって、アンゲロス家はコムネノス家とも血縁関係に入った。次いで、コンスタンティノスとテオドラの息子、ヨアネス・アンゲロスはゾエ・ドゥーカイナと結婚し、ドゥーカス家との絆を強めた。このヨアネスとゾエの息子たちが一二〇四年以降、テッサロニキ（一二二四年から四六年まで）とイピロス（私生児のミカエルが創始者）の支配者となる。*ODB*, s.v. ‘Angelos’ (A. Kazhdan)、および D.M. Nicol, *The Despotate of Epirus* (Oxford, 1957); idem, *The Despotate of Epiros, 1267-1479* (Cambridge, 1984) 巻末の系図と、R. Macrides, *op.cit.*, table 4 を参照。

<sup>61</sup> D.M. Nicol, ‘The prosopography of the Byzantine aristocracy’, in: M. Angold ed., *Byzantine Aristocracy, IX to XIII Centuries* (Oxford, 1984), 82. ヨアネス・ドゥーカスの他称は、彼が母（テオドラ・コムネナ）に加え、妻（ゾエ・ドゥーカイナ）を通じてドゥーカス家に連なっていたからかもしれない。

<sup>62</sup> *Ibid.*, 82. ニコルによれば、テオドロスの皇帝就任式を行ったオフリド大主教デメトリオ

成したテオドロスは、一二三〇年、クロコトニザの戦いでブルガリア国王イヴァン・アサン率いる軍勢に敗北を喫し、捕虜となるが<sup>63</sup>、一三世紀の歴史家ゲオルギオス・アクロポリテスはその史書において、テオドロスの姓を、事件を境にコムネノスからアングロスに変化させている<sup>64</sup>。テオドロスの子で、一二四四年から四六年までテッサロニキを支配したデメトリオスに対しても、アクロポリテスはアングロスの姓を用いている。イピロス侯（デスポテス）ミカエル二世の私生児で、後にセバストクラトルの称号をビザンツから得てテッサリアに半独立国家を作ったヨアネス一世は、一般的にはドゥーカスの姓で知られている。このヨアネスの息子コンスタンティノスもドゥーカス姓で呼ばれている<sup>65</sup>。

このように見ると、マリアの夫の名はドゥーカス家の血筋をも引くアングロス家のミカエルという具合に読み替えることができる。私生児のヨアネスがヴラク人（ワラキア人）有力者タロナスの娘との間に儲けた子の中に、ミカエルの名を持つ人物がいるが、彼はパキュメレスによって一三〇七年に死亡したと伝えられているので、マリアの夫とは別人物である<sup>66</sup>。結局のところ推測に頼らざるを得ないのだが、マリアの夫ミカエルは、最終的にはニケーア帝国の伸張によって没落を余儀なくされた、テッサロニキのコムネノス・ドゥーカス家に連なっていた可能性が高い。父系でみれば、彼らはコムネノス・ドゥーカス家というよりむしろドゥーカス・アングロス家と呼ばれうる存在であった。加えて政治的に没落した一二四〇年代以降、彼らは名誉あるコムネノスの姓を公然とは使用できず、アングロスとドゥーカスの両姓を併用せざるをえない状況に置かれたはずである<sup>67</sup>。

また、ミカエルの結婚相手の出自も証拠となろう。というのも、史料に記録されているアングロス家の出身者が軒並みパレオロゴス家や西欧のヴィラルドゥワン家などの名門出身者と結婚しているのに対して、ミカエルの二人の妻はいずれも、名の知れた貴族家門で

---

ス・コマテノスは、テオドロスをメガス・コムネノス（大コムネノス）と称したという。

<sup>63</sup> テオドロスがテッサロニキに建国した国家については、D.M. Nicol, *The Despotate of Epiros*, 47-140; F. Bredenkamp, *The Byzantine Empire of Thessaloniki (1224-1242)* (Thessaloniki, 1994)を参照。

<sup>64</sup> R. Macrides, *op.cit.*, 41. これはアクロポリテスにとって、コムネノス、ドゥーカス、アングロスの三姓の中で、アングロスがもっとも格下であったことを意味する。

<sup>65</sup> D.M. Nicol, 'The prosopography of the Byzantine aristocracy', 82.

<sup>66</sup> Pachymeres, VII, 25, 27.

<sup>67</sup> テッサロニキに拠点を置いたテオドロスには、ヨアネスとデメトリオスの二人の息子がいたことが知られているが、彼ら二人に子がいたかどうかは定かではない。ちなみに、一二四六年に捕虜となったデメトリオスはビティニアの牢獄に投獄されたといわれているが、その後は史料に現れない。Georgios Akropolites, *Historia*, in: *Opera*, I, ed. A. Heisenberg, corr. P. Wirth (Stuttgart, 1978), 46; R. Macrides, *op.cit.*, 242.

はなく、地方の有力者家庭の出身と思われるからである。ミカエルの前妻の実父、すなわちラウラへの寄進地ハギア・マリアの本来の所有者は、パンセバストス・セバストスの称号を持つファルマケスである。薬ないし毒薬を意味する名詞ファルマコンに由来すると思しきこの固有名詞は、名というよりは姓と見て間違いない。このファルマケスによって知られている人物は、重複の可能性を考慮外とすれば、パレオロゴス朝期に計七名存在しており、いずれも史料に登場する時期は一四世紀である。興味深いことに、この七名のうち、ミカエルの義父を含めた四名がハルキディキ半島の土地所有者として言及されている<sup>68</sup>。こうした情報から、ファルマケス家はハルキディキ半島に拠点を置くとともに、婚姻や官職・称号保有を通じて政治・社会的上昇を図ろうとした一家門であったと推測できる。

一方、マリアが連なるスパルテノス家に関する情報は相対的に多い。パレオロゴス朝期においてスパルテノスの固有名詞を有する人物は、これも重複の可能性を除外すれば、一六名が確認できる<sup>69</sup>。ファルマケス家の場合、史料はほぼ土地証書に限定されたが、スパルテノス家の場合は、証書以外の史料にも言及が見られるため、それらをもとに家系を大まかに再構成することができる。家系発展の起点となるのは、マリアから見れば曾祖父に当たるデメトリオス・スパルテノスである。歴史家アクロポリテスによると、ニケーア時代の皇帝ヨアネス三世バタゼスが一二四六年にヨーロッパ遠征を行ったとき、テッサロニキの支配者デメトリオス・アンゲロス配下の一部がヨアネス側に寝返り、デメトリオスを捕らえたうえでテッサロニキをヨアネスに明け渡した。この一団の中でとりわけ目立つ活躍を見せたのが、スパルテノスとカンパノスという二人の人物であった<sup>70</sup>。アクロポリテスはスパルテノスの名を明かしてはいないが、彼がデメトリオス・スパルテノスであったことはほぼ間違いない。なぜなら、イヴィロン修道院が保存する一二六二年三月付けの土地台帳に、台帳を作成した行政官としてデメトリオス・スパルテノスとニコラオス・カンパノスの名がそろって記されており、両者の姓がアクロポリテスの記述と符合するからである<sup>71</sup>。

---

<sup>68</sup> *PLP*, nos. 29640-29646.

<sup>69</sup> *PLP*, nos. 26490-26505. 合計一六名のうち一人は女性、スパルテネ (no. 26490) である。

<sup>70</sup> Akropolites, *Historia*, 45; R. Macrides, *op.cit.*, 235-8.

<sup>71</sup> *Actes d'Iviron*, III: *de 1204 à 1328*, ed. J. Lefort et al. (Archives de l'Athos, XVIII; Paris, 1994), no. 59. この証書において両者はともに皇帝のドゥーロスとセバストスの称号を帯びているが、テッサロニキの行政長官（プロカテメノス）として言及されているのはニコラオス・カンパノス (*PLP*, no. 10832) のほうである。スパルテノスとカンパノスについては、R. Macrides, *op.cit.*, 238-9 も参照。マクリデスは言及していないが、カンパノスの名が意味するのはカンパニア人である。



おそらく皇帝ヨアネスへの多大な貢献が評価されてであろう、両者は皇帝のドゥーロス（オイケイオスの別称）とセバストスの二称号とともに、テッサロニキの行政官職ないしそれに準ずるポストを授与されたものと思われる。デメトリオスは一二五六年、テオドロス・ドケイアノスなる人物とともに、皇帝テオドロス二世ラスカリスからローマ教皇アレクサンデル四世のもとへ使者として派遣されているが、これはニケーア皇帝にとってのデメトリオスの政治的重要性を端的に物語る<sup>72</sup>。また、以下で言及する別の証書は、デメトリオスが皇帝からハルキディキ半島内の土地を授与されたことを伝えており、これも皇帝ヨアネスからデメトリオスへの報償であった可能性が高いだろう。

デメトリオス自身とスパルテノス家の状況をよく伝えるのは、一二六五年九月に作成された、デメトリオスの三人の息子のヒランダル修道院への寄進証書である<sup>73</sup>。デメトリオスは晩年、修道士となってダビドの新名を名乗り、魂の救いのためテッサロニキ地方の様々な修道院、とりわけヒランダル修道院に数多くの寄進を行った。父親デメトリオス＝ダビドの没後、彼の息子、ヨアネス、コンスタンティノス、ミカエルは、皇帝の魂の救いと亡き父親および彼ら自身の名の記念のために、修道司祭エウスタティオス司るヒランダル修道院へ、ハルキディキ半島内にある土地を寄進した<sup>74</sup>。一方、一二八〇年代と続く九〇年代には、ヨアネスがパンセバストス・セバストスと皇帝のドゥーロスの称号を帯び、テッサロニキの行政長官（プロカテメノス）を務めていたことが確認できる。このヨアネスの息子に当たる人物がマリアの父、デメトリオスである。すでに見たとおり、デメトリオスはパンセバストス・セバストスの称号と皇帝のオイケイオスの称号を有しており、両称号は

<sup>72</sup> *PLP*, no. 26495; Dölger, *Regesten*, no. 1835; R. Macrides, *op.cit.*, 238.

<sup>73</sup> *Actes de Chilandar*, I, no. 7.

<sup>74</sup> 別の証書からはヨアネスら三名のほかに、パンセバストス・セバストスの称号を持つアンドロニコス（*PLP*, no. 26494）という名の息子もいたことが確認できる。*Actes d'Iviron*, III, no. 67 (p. 134). この証書において、アンドロニコスはパンセバストス・セバストスのヨアネス・スパルテノスの兄弟として言及されている。*PLP*およびヒランダル修道院文書の編者は、コンスタンティノスとミカエルの兄弟を持つヨアネスと、アンドロニコスを兄弟に持つヨアネスが別人物であると理解しているが、筆者はヨアネスが同一人物であるとの立場を採用している。その理由は、ヒランダルへの証書の記述は、デメトリオスの息子が証書で言及されている三名よりも多くいた可能性を排除しないからである。一二六五年のヒランダルへの証書作成時、アンドロニコスがいまだ年少であったとすれば、その名が証書に現れない可能性があるし、彼がデメトリオスの私生児であった可能性もある。なお、ラウラ修道院文書の編者はヨアネスを同一人物と解している。*Actes de Lavra*, II, no. 98, pp. 137-8. スパルテノス家については、以下の論文がある。M. Živojinović, 'Spartini: prilog prosopographij', *Zbornik Radova Vizantološkog Instituta* 27/28 (1989), 177-84.

父であるヨアネスから継承したものと考えることができる<sup>75</sup>。これらから推測できるのは、スパルテノス家がもともとはハルキディキ半島およびテッサロニキに拠点を有する在地の名望家であり、マリアの曾祖父デメトリオスの功績によって、アンゲロス・ドゥーカス家の支配領からビザンツ帝国領に変化した同地域で、より強固な政治的地位を獲得したことである。

以上のように、マリアの周辺の人物や家門を考察した結果、彼らの活動の場がハルキディキ半島やテッサロニキを中心とする比較的狭い領域に限定されていたことが明らかになった。また、ミカエルの二度の結婚からは彼らローカルな有力者たちが婚姻に込めた意図も浮かび上がる。ドゥーカスやアンゲロスの姓が示すように、おそらくミカエル・アンゲロスなる人物が彼らのローカルな人間関係の網の目の中ではひととき高貴な存在であった。

---

<sup>75</sup> 一四世紀半ばには、皇帝のオイケイオスの称号を持つテオドロス・ドゥーカス・スパルテノス (*PLP*, no. 26498) なる人物が、姉妹アガペ・アンゲリナ・スフランザイナ・パレオロギナ (*PLP*, no. 21341) とともに、ハルキディキ半島内のハギア・マリアに関係する人物としてラウラ文書に現れている。関係している土地が共通していることに加え、両名がそれぞれマリアとミカエル夫婦の姓を帯びていることから、両者はスパルテノス家出身のマリアと夫ミカエル・アンゲロス・ドゥーカスの子供と見て間違いないだろう。 *Actes de Lavra*, III: *de 1329 à 1350*, ed. P. Lemerle et al. (Archives de l'Athos, X; Paris, 1979), Appendix 12. 一三四一年七月四日付けのこの証書において、修道女であるアガペは所有していたハギア・マリアの土地を兄弟であるテオドロスと義兄弟のマヌエル・ファクセノスに売却している。

ちなみに、アガペの姓は彼女がスフランゼス家に嫁いだことを示唆する。アガペとの関係は不明であるが、一四世紀前半にはスフランゼス・パレオロゴス (*PLP*, no. 27282) なる人物 (名は不明) がメガス・ストラトペダルケス (軍司令官の称号) として活躍したことが知られている。彼は皇帝アンドロニコス三世に仕えた軍人で、一三三四年、クマン系の有力軍人シュルギアネス (シルヤニス; *PLP*, no. 27167) がセルビア国王ドゥシャンを後ろ盾にテッサロニキへの攻撃を企図した際、単身でシュルギアネスに接近し、その暗殺に成功した。この功績によって彼はメガス・ストラトペダルケスの地位を授与されたが、五年後の一三三九年、遠征先の都市アルタで死亡した。

興味深いのは、以上のスフランゼス・パレオロゴスの没年 (一三三九年) と、アガペがその所有地を売却した年 (一三四一年七月四日) が近いことである。ビザンツにおいて夫を亡くした貴族女性のその後の選択肢が再婚と修道女となることのいずれか二つであったことを考慮すると、アガペ・アンゲリナがスフランゼス・パレオロゴスの妻であり、夫の死を受けて修道女となり、財産を親族に売却したことは十分に考えられる。Cf. A.-M. Talbot, 'Late Byzantine nuns: choice or necessity', *Byzantinische Forschungen* 9 (1985), 103-17; eadem, 'Women', in: G. Cavallo ed., *The Byzantines* (Chicago, 1997), 117-43, esp. 137-42.

また、アンドロニコス三世治下、テッサロニキの行政官に任じられていたシュルギアネスにスフランゼス・パレオロゴスが接近可能であったという事実は、後者がテッサロニキの有力者の一人であったことを示唆する。この点からも、テッサロニキとハルキディキ半島を勢力圏としたスパルテノス家出身のアガペが彼の夫であった可能性は高いといえよう。ラウラ修道院にはミカエル・スフランゼスなる人物の名が収録された死者記念帳があるという。Cf. H.-V. Beyer, 'Michael Sphrantzes im Totengedenkbuch des Lavraklosters', *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 40 (1990), 295-330.

前妻の出身であるファルマケス家も、後妻マリアの出身であるスパルテノス家も、ミカエルのアングロス家と血縁関係に入ることで、家門のさらなる繁栄を図ったと思われる。

それでは、彼らのローカルな関係の中にニフォンをどのように位置づけることができるのか。推測できるのは、きわめてローカルな関係であるがゆえに、近隣に位置するアトスのラウラ修道院長が彼らに対して大きな影響力を持っていた可能性である<sup>76</sup>。ここで再度注目すべきは、マリアの寄進に同意を与えたのが、ニフォンと実父デメトリオスである点である。デメトリオスの同意は、夫亡き後、実父がマリアに対して一定の影響力を回復していたことを示しており、ここからはビザンツの地域共同体の有力者家庭における父娘関係の一端が窺える。

一方、ニフォンへの言及からは、彼が当時、マリアの霊的父（師父）としての役目を担っていたことが読み取れる。その最たる理由は、ラウラを含めハルキディキ半島を舞台とする証書に本来ならまったく無関係の教区の主教が登場していることである。ハルキディキ半島を管轄するのはテッサロニキ府主教であり、小アジアの北西、ヘレスポントス地方の都市キジコスの府主教が同意者として現れているのは、マリアとニフォンの間にかねてから個人的な接点があったからにほかならない。ニフォンがマリアの実父デメトリオスよりも先に言及されている点もこれに関係する。二人の同意者の名の序列は、ニフォンがマリアの実父よりも権威ある存在であったことを意味しており、キリスト教世界においては理念的に血縁よりも霊的な絆が優先されることを考慮に入れると、ニフォンは彼女にとって血縁を越える父親であったと判断できるのである。

貴族女性が著名な修道士や聖職者を自らの宗教的指導者に迎えることは、西欧世界と同じくビザンツにおいても一般的であった<sup>77</sup>。パレオロゴス朝期では、アンドロニコス二世に仕えた高官ニケフォロス・クムノスの娘、エイレネ＝エウロギアがフィラデルフィア府主教テオレプトスを師父に持ち、書簡を交換していたことが知られている<sup>78</sup>。マリアの場合は、

---

<sup>76</sup> この問題に関しては、アトス山と女性の関係を多角的に検討したタルボットの論文が重要。A.-M. Talbot, 'Women and Mt. Athos', in: A. Bryer and M. Cunningham eds., *Mount Athos and Byzantine Monasticism* (Aldershot, 1996), 67-79, esp. 72-9.

<sup>77</sup> 著名な例は、皇帝アレクシオス一世コムネノスの母、アンナ・ダラッセナと修道士フィレオテスのキリロスの関係であろう。M. Angold, *Church and Society in Byzantium under the Comneni, 1081-1261* (Cambridge, 1995), 283-5.

<sup>78</sup> エイレネ＝エウロギアとテオレプトスの関係については、V. Laurent, 'Une princesse byzantine au cloître', *Echos d'Orient* 29 (1930), 29-60; A.C. Hero, 'Irene-Eulogia Choumnaina Palaiologina abbess of the convent of Philanthropos Soter in Constantinople', *Byzantinische Forschungen* 9 (1985), 119-47, esp. 121-32; eadem, *The Life and Letters of Theoleptos of Philadelphia* (Brookline, Mass., 1994), 11-20; eadem,

首都社会に暮らしたエイレネ＝エウロギアとは異なり、首都から隔たったテッサロニキ地方に生きる有力者女性として、同地域内で大きな名声を有したラウラ修道院長の上長ニフォンを個人的な指導者としていても不思議ではない。地域的な接点が乏しいことから、キジコス府主教となってから後のニフォンがマリアの師父となったことは想定しにくく、二人の師弟的な関係はニフォンが府主教に就任する以前、つまり、彼がラウラの修道院長であった時代に形成された可能性が高い。

両者のコミュニケーションの方法は、アトス山外での直接的な面会、もしくは書簡を使用したものであったろう<sup>79</sup>。現存してはいないが、両者の間で書簡がやり取りされたであろうことは容易に推測できる。というのも、外的な状況がきわめて緊迫している中、ニフォンがマリアと面会するためだけにキジコスを離れ、テッサロニキを訪問するとは考えにくいし、逆に、マリアがキジコスを訪れることも不可能であったと思われるからである（かりに本人が望んだとしても、実父や周囲の人々が制止したであろう）。とすれば、寄進についてニフォンの同意ないし助言を求めたマリアに対し、ニフォンが返答したのは現存しない返信の書簡によって、と考えるのがもっとも自然である。

この証書が示唆するニフォンの活動がグレゴラスの記述と部分的に一致することはもとより<sup>80</sup>、マリアがニフォンの同意を介して、ラウラに寄進を行っている事実も興味深い。マリアの曾祖父デメトリオスとその三人の息子たちの場合、彼らとセルビア人修道院であるヒランダルとの密接な関係が見て取れたが、マリアの場合はヒランダルではなく、ギリシヤ人修道院のラウラを寄進先に指定している。ここにはマリアに対するニフォンの影響力を認めることができよう。ニフォンを師父に持ったマリアがラウラを寄進先に選択するの

---

‘Theoleptos of Philadelphia (ca. 1250-1322): from solitary to activist’, in: S. Ćurčić and D. Mouriki eds., *op.cit.*, 35-6 を参照。皇帝アンドロニコスの子息である夫ヨアネス・パレオロゴスが一三〇七年に急逝したため、エイレネは一三〇三年の結婚からわずか四年後、一六歳の若さで寡婦となった。実父であるニケフォロス・クムノスはエイレネの再婚を考慮していたが、彼女は師父テオレプトスの勧めを受け、つまりは父クムノスの反対を押し切る形で修道女となり、エウドキアの新名を名乗った。ヨアネス・パレオロゴスの結婚と死については、Talbot, nos. 37 and 96 および両書簡のコメンタリーを参照。エイレネ＝エウドキアはテオレプトスの死後、総主教アタナシオスの弟子と思しき名称不明の別の師父を迎え入れ、往復書簡を残している。Cf. V. Laurent, ‘La direction spirituelle à Byzance’, *REB* 14 (1956), 48-86; A. Hero, *A Woman’s Quest for Spiritual Guidance* (Brookline, Mass., 1988).

<sup>79</sup> アトスの修道士らが山外の名づけ子や世俗の弟子たちに面会することを目的に外出することは、奨励されてはいなかったが、禁止事項ではなかった。A.-M. Talbot, ‘Women and Mt. Athos’, 72.

<sup>80</sup> グレゴラスの記すニフォンの女子修道院への関心が、女性の霊的生活に対する真摯な応答として解釈できる場合がそうである。

は自然な成り行きであっただろうが、視点をマリアからニフォンへと移せば、彼は自らがかつて上長として支配したラウラに、山外の弟子であるマリアの寄進を通じて恩恵をもたらしている。つまり、ニフォンは教会ヒエラルキーにおける重要な府主教位を獲得した後、出身修道院へ物質的な配慮を示しているのである<sup>81</sup>。

この行動は注目すべきことに、一二八九年のアタナシオスの総主教就任直後に、ラウラへの財産委譲を総主教に願い出たテッサロニキ府主教のそれと共通している。別稿で検討したので詳細は省略するが、一二九〇年代にテッサロニキ府主教を務めたヤコボスなる教会人は一二八〇年代後半、ラウラの院長を務めていた<sup>82</sup>。この人物をテッサロニキ府主教に任じたのが、総主教に就任したばかりのアタナシオスであることはほぼ確実である。実際

<sup>81</sup> 本章で検討したラウラ修道院の証書のほかに、ラウラ修道院長時代のニフォンの活動の一端に光を投じる史料がある。それは、テッサロニキ市内の聖使徒教会の内部に残された以下の碑文である。J.-M. Spieser, op.cit., 169-70 : ‘+ Παῦλο(ς) μοναχὸς [καὶ] προϊστάμ(εν)ο(ς) τῆς σεβασμίας μ[ο]νῆς ταύ[τ]ης κ(αὶ) μαθητῆ(ς) [τοῦ ἀγί]ωτάτου οἰκουμ(ε)ν[ι]κοῦ π(ατ)ριάρχου κ(αὶ) κτίτορο(ς) κύρ Νίφωνο(ς) κ(αὶ) δεύτερος κτίτορ.’

邦訳は「(十字) パウロス、この尊崇すべき修道院を司る修道士、また創始者であるいと尊き世界総主教ニフォン殿の弟子にして、第二の創始者」。

つまり、この碑文は、総主教ニフォンとその弟子のパウロスが、今日、聖使徒の名を冠して知られる教会の修復を共同で、もしくは連続して実施したことを示す。この教会がテッサロニキに位置することを考えると、パウロスなる修道士は、ニフォンがラウラ修道院長を務めていた時期、もしくは修道院長になる以前に同院で指導していた弟子の一人であった可能性がきわめて高い。由緒ある大修道院ラウラで院長を務めていることから、ニフォンがラウラで長期にわたって暮らしたことは確実であり、ラウラ以外の場に両者の師弟関係を求めるのは、不可能ではないにせよ、困難である。

ニフォンとパウロスの師弟関係をラウラ修道院に帰するこの推測がかりに正しければ、無記名のこの修道院はラウラ修道院とかかわりの深い施設であったということになる。

一部学者はこの修道院をゴルゴエペコースと考えているが、筆者の考えでは、それはフィロカレスである。Cf. Janin, *Les églises et les monastères des grands centres byzantins*, 380; A. Χυngoropoulos, ‘Μονὴ τῶν Ἀποστόλων ἡ τῆς Θεοτόκου’, *Ἑλληνικά, Παράρτημα*, vol. 4 (Προσφορά εἰς Σ.Π. Κυριακίδη: Thessaoniki, 1953), 726-35. フィロカレスとラウラの関係については、マグダリーノが、ジャンンの地誌研究を補足する形で二つの証拠を指摘している。すなわち、一つは、一四世紀半ばに総主教を務めたフィロテオス・コッキノスが一時期、フィロカレスの修道院長を務めており、一三〇七年に殺害された同院の修道士ニコデモスの伝記を執筆していること。もう一つは、一三〇四／五年に新たな修道院長が任じられた際、総主教アタナシオスがこの人事の確認をラウラの修道士の前で行っていることである。P. Magdalino, ‘Some additions and corrections to the list of Byzantine churches and monasteries in Thessalonica’, *REB* 35 (1977), 281-2.

マグダリーノの指摘する証拠のほか、殺害された修道士ニコデモスが総主教ニフォンと同じベロイア出身であったことも、間接的な証拠となりうるだろう。ニコデモスについては、Philotheos Kokkinos, ‘Υπόμνημα εἰς ὅσιον Νικόδημου, in: *Φιλοθέου Κωνσταντινουπόλεως τοῦ Κοκκίνου Ἀγιολογικά Ἔργα*, vol. 1, ed. D.G. Tsames (Thessaloniki, 1985), 83-93; S.A. Ivanov, *Holy Fools in Byzantium and Beyond* (Oxford, 2006), 223-7. 聖使徒教会とフィロカレス修道院の問題については別稿で論じる予定である。

<sup>82</sup> 拙稿「総主教アタナシオスと二人のラウラ修道院長」の第一章を参照。

の証書では名は明かされていないが、このヤコボスと思しき新任の主教はアタナシオスに対して、エーゲ海のスキロス島にある総主教座の附属財産をラウラに委譲するよう求めた。アタナシオスはこれに好意的に応え、総主教の印璽書簡をラウラに送って財産の委譲を確定させた<sup>83</sup>。テッサロニキ府主教でありながら、ラウラへの恩恵を総主教に求めるといういささか特異な行動は、アタナシオスと府主教あるいはアタナシオスとラウラの関係以上に、府主教とラウラの関係が密接かつ強固であり、さらに、府主教がラウラの経済的要求を十全に理解していなければ説明困難である。ヤコボスはこれらの条件を満たすがゆえに、アタナシオスに依頼したテッサロニキ府主教であると特定できるわけである。

実際の理由は何であれ、ミカエル八世の没後、ラウラはアトス山内の他の修道院に先駆けるかのように経済的發展を追及し始めた<sup>84</sup>。この時代とともにラウラの上長を経験し、管轄する教区は異なるとはいえ、重要な府主教位を与えられたヤコボスとニフォンには、おそらく、ラウラは特別な場でなければならないという自意識とともに、ラウラを離れてもその発展に寄与したいという願望があったのであろう。

### 第三章 府主教選出の時期と経緯

キジコス府主教時代のニフォンに言及する史料を丹念に検討した結果、ニフォンが一三〇三年七月下旬の時点でキジコスにいたことのほか、彼がラウラ修道院長時代にテッサロニキ地方の貴族女性マリアを指導していたこと、つまり、彼がラウラやアトスの内部だけではなく、山外の地域共同体においても一定の影響力を有しており、マリアを通じてラウラに恩恵を施したことが確認できた。これを踏まえたうえで、ニフォンはいつ、そしてなぜキジコス府主教に任じられたのかという問題に歩を進める。総主教アタナシオスが彼の選出に絡んだ可能性はあるのか。あるとすれば、その史料的な根拠となるのは何か。事実関係を確証するような史料は存在しないため、以下で試みられるのは関連するいくつかの証拠の分析ともっとも妥当と思われる仮説の追求である。

すでに示唆したとおり、アタナシオスによるニフォンの任命は成立不可能な仮説ではない。アタナシオスの総主教復位が一三〇三年六月二三日であり、ニフォンが史料に現れるのはそれから約一ヶ月後である。コンスタンティノーブルからキジコスへは、条件さえ整

<sup>83</sup> *Actes de Lavra*, II, no. 82, p. 56.

<sup>84</sup> 一三世紀以降のラウラの土地集積の過程については、N. Svoronos, 'Le domaine de Lavra sous les Paléologues', in: *Actes de Lavra*, IV, ed. P. Lemerle et al. (Archives de l'Athos, XI; Paris, 1982), 63-173 を参照。

えば、数日の航海で到達することが可能であったし、コンスタンティノーブルとラウラ修道院の間も同じく海路を利用すれば、一週間程度で移動できたであろう<sup>85</sup>。これらを考慮に入れたうえで、アタナシオスが総主教就任と同時に、ニフォンを召喚すべく、伝令をラウラに送ったと想定すれば、二週間程度でニフォンはコンスタンティノーブルに到達しえたであろう。その後、ニフォンがコンスタンティノーブルでの叙階式に臨み、即座にキジコスに向かったとすれば、七月中旬には彼はキジコスに到着しえたはずである。これは、住民の避難時にニフォンが同地の防衛を組織したというパキュメレスの報告に反しない。ただし、この想定は気象条件が良好であり、アタナシオスとニフォンの両者が速やかに行動した場合にのみ成立しうる。

アタナシオスによるニフォンの選出を仮説的に想定する場合、彼が就任以前からニフォンの登用を考慮し、就任と同時にニフォンを首都に召喚したことは十分ありうる。なぜなら、総主教ヨアネス・コスマスの在位末期、アタナシオスはクセロロフォスの修道院の中で、教会の混乱と小アジア社会の窮状を解消する方策を彼独自の視点から思案していたからである<sup>86</sup>。小アジアの危機とほぼ同時期に発生した教会の新たな混乱は、一二九九年、皇女シモニスの結婚をめぐる総主教と皇帝の意見対立に端を発した<sup>87</sup>。シモニスの結婚に頑なに反対したヨアネスは、皇帝がシモニスを連れてテッサロニキに向かった後、首都のパンマカリストス修道院に退いた。ヨアネスのストライキとでもいうべき行動は、一三〇〇年に首都に帰還した皇帝が彼に謝罪するまで続いた。翌一三〇一年には、聖務停止の処罰を皇帝から受けていたエフェソス府主教ヨアネス・ケイラスの復帰をめぐって、聖職者内部で対立が生じた。皇帝と主教団の多くはケイラスの復帰を支持したが、総主教やフィラデルフィア府主教テオレプトスら、一部の聖職者は反対の姿勢を堅持した<sup>88</sup>。それから間もな

---

<sup>85</sup> Cf. *ODB*, s.v. 'Navigation' (E. Malamut); E. Malamut, 'Les voyageurs à l'époque médiévale', in: B. Geyer and J. Lefort eds., *op.cit.*, 473-84; A. Avramea, 'Land and sea communications, fourth-fifteenth centuries', in: A.E. Laiou ed., *The Economic History of Byzantium from the Seventh through the Fifteenth Century* (Washington, D.C., 2002), 57-90, esp. 78-9. アヴラメアによれば、ラウラには港があり、天候と風向きがよければ、三日間の航海でコンスタンティノーブルに到達することが可能であったという。

<sup>86</sup> 筆者の博士論文の第二章の議論を参照。

<sup>87</sup> アンドロニコスとその後妻、モンフェラート家出身のヨーランダ＝エイレネの間に生まれた皇女シモニスの当時の年齢は六歳であった。シモニスをセルビア国王に嫁がせる政策は、ビザンツとセルビアの和平実現および関係強化を目的とするものであったが、総主教ヨアネスはシモニスの年齢とセルビア国王の放埒な性格を理由として、婚姻に断固反対する姿勢をとった。Pachymeres, IX, 31, 32 and X, 2, 9.

<sup>88</sup> Pachymeres, X, 10.

く、セリブリア府主教ヒラリオンが、総主教が皇帝に対する陰謀に加担しているとの情報を皇帝に通知した。総主教は潔白を訴え、ヒラリオンと彼に情報を提供した匿名の人物に対する調査を皇帝に求めたが、皇帝はこれに応じなかった<sup>89</sup>。こうして、総主教と皇帝、および総主教と主教団の間の緊張が高じた結果、一三〇二年七月、ヨアネスはかねてより居住していたパンマカリスト修道院から辞任状を皇帝に送った<sup>90</sup>。実際は、ケイラスの復権問題が表面化した一三〇一年春頃より、ヨアネスがパンマカリスト修道院に隠退したまま総主教座にまったく現れなくなったため、教会の行政はアタナシオスが復位する一三〇三年六月まで、ほぼ二年以上にわたって、総主教と親しい主教らが暫定的に担当する状態に置かれていた<sup>91</sup>。こうして一二九九年以降、教会で深刻な対立が断続的に発生する間、小アジアのビザンツ領の情勢は日増しに悪化していた。

アタナシオスが自らの復位の可能性を感知した瞬間があるとすれば、それは一三〇三年一月、皇帝が聖職者や首都住民らとともに、クセロロフォスの修道院に暮らす彼を訪問したときであろう。皇帝はアタナシオスを総主教に復位させようとする自らの意志を、大勢を引き連れて彼を訪ねるという行為によって、アタナシオスだけでなく、市民や聖職者にも明示したのである<sup>92</sup>。ヨアネスがアタナシオスの復位を支持する勢力に破門を宣告する構えを見せたため、その復位は、ヨアネスが皇帝の説得を容れて最終的に退位した六月まで実現しなかったが、アタナシオスはその間に、教会と小アジア社会の危機的状況を打開すべく、様々な具体的手段を講じていたであろう。つまり、かりにアタナシオスが、キジコスへのニフォンの派遣をあらかじめ考慮していたとすれば、彼は復位と同時に、あるいは復位に先立ってニフォンに通達したはずである<sup>93</sup>。

<sup>89</sup> Pachymeres, X, 27, 28. パキュメレスは、皇帝がこの段階ですでに、アタナシオスの総主教復位を画策していたからであろうとその理由を推測している。

<sup>90</sup> 教会会議を構成する主教らは総主教の辞任状を受理しなかったため、ヨアネスは自らの意に反して、総主教位をしばらく保持することになった。Pachymeres, X, 29; Laurent, *Regestes*, no. 1583.

<sup>91</sup> Pachymeres, X, 32. ヨアネスが正式に退位したのは一三〇三年六月二一日、アタナシオスの復位はその二日後の六月二三日である。ヨアネスが総主教座の行政を一部主教に委任していたことについては、パキュメレスの史書以外にも証拠がある。たとえば、一三〇〇年七月にイヴィロン修道院に総主教座から送られた証書がそうで、証書の作成者であるアンキラ府主教バピラスは冒頭で、総主教ヨアネスから書簡を受け、彼の代理として問題に対処したことを記している。Actes d'Ivion, III, no. 69.

<sup>92</sup> 筆者の博士論文の第二章を参照。

<sup>93</sup> アタナシオスは総主教に復位する前、一三〇三年春頃に皇帝に宛てた書簡の中で、「聞き入れられなかったけれども、私はある人を東方に派遣するよう示唆した πεμφθῆναι τινά, εἰ καὶ οὐκ εἰσηκούσθην, ὑπέμνησα πρὸς Ἀνατολήν」と述べている。Talbot, no. 37, ll. 30-1. 確



一二九三年の不本意な辞任の後、首都の修道院で弟子たちと暮らしていたアタナシオスは、ビザンツ領アナトリアの窮状を正確に把握していた。アタナシオス書簡集のヴァティカン写本の最初に置かれた書簡は、まさにトルコ人勢力の台頭にともなう小アジアの危機を受けて書かれたものである。彼はこの書簡で、一二九九年から一三〇〇年にかけてテッサロニキに滞在していた皇帝に対し、直ちに首都に帰還し、小アジア問題に対処するように強く求めている<sup>94</sup>。また、アタナシオスが復位直後に執筆した書簡は、小アジア住民に宛てられた回覧状である。ビザンツ人の懺悔こそが彼らを危機から救うと説くその書簡は、小アジアのいや増す危機についてのアタナシオスの認識を鮮やかに映し出している<sup>95</sup>。帝国内外に暮らす全正教徒の精神的指導者である彼が、危機に瀕した住民に第一に求めたのは懺悔と正しき生活の実践であった。だが、彼はその他の方法でも危機に対処しようとしている。このコンテキストで理解されるべきなのが、皇帝のプロノイア再分配と軍隊再編に対するアタナシオスの同意である。大洪水の後、大空に放たれた鳩がオリーブの若枝を持ち帰ることによって、陸地の存在をノアに知らせたように、アタナシオスはオリーブの若枝を無言で皇帝に送り、それによって皇帝がノアのごとく正しき道にいることを示したのである<sup>96</sup>。

一方、復位以前に皇帝に送られた書簡や、就任直後のオリーブの若枝のエピソードには、とりわけ破局的な状況にあつては、世俗の指導者や世俗の人々を教会の指導者が正しく導くべきというアタナシオスの強い自意識を見て取ることができる。これに対応すると思われるのは、アタナシオスが主教職に認めた多大な重要性である。彼は複数の書簡で、首都に滞在する主教らを厳しく批判しているが、批判の理由の一つは、彼らが教区を離脱することによって、教区民を指導する義務を放棄していることにあった。もちろん、教区を離脱した主教らが首都においてたびたび独自の会合を開き、教会の秩序を乱す原因になっていることも彼は問題視しているが、危機的な状況であるからこそ、主教が最後まで教区に留まり、その司牧の責務を全うすべきと彼は主張しているのである<sup>97</sup>。

---

証するのは不可能であるが、「ある人」はニフォンを指しているかもしれない。

<sup>94</sup> Talbot, no. 1; Laurent, *Regestes*, appendix 3.

<sup>95</sup> Laurent, *Regestes*, no. 1589; D. Kalomirakis, ‘Ο οἰκουμενικὸς πατριάρχης Ἅγιος Ἀθανάσιος Ἀ καὶ ἡ διδασκαλία του πρὸς τοὺς κατοίκους τῆς Μικρᾶς Ἀσίας κατὰ τὸ 1303’, *Δελτίο Κέντρου Μικρασιατικῶν Μελετῶν* 8 (1990/91), 23-50.

<sup>96</sup> アタナシオスがノアの物語を想起させるような方法を用いたのは、一二九七年の破門状発見時に鳩の雛が関係していたからかもしれない。Pachymeres, IX, 24.

<sup>97</sup> J.L. Boojamra, *Church Reform*, 91-128.

以上を踏まえて注目すべきは、ニフォンがキジコスにおいてとった行動が総主教の理想と合致していることである。これは果たして偶然といえるだろうか。再び確認しておけば、パキュメレスの歴史書において、皇帝による改革計画とオリーブの若枝のエピソードは、ニフォンによるキジコス防衛の記述のすぐ前に位置する。アタナシオスは復位直後に、小アジアの軍隊を再編しようとする皇帝の計画に同意を示すとともに、現地の住民らに懺悔の必要を説く回覧状を送付した。おそらくはこの二つの行動とほぼ同時期に、彼は宗教的指導者を欠いたまま危難を迎えようとしていた都市キジコスに、信頼するラウラの修道院長を派遣したのではあるまいか。

以上のような想定は十分可能ではあっても、アタナシオスが復位した時点でキジコスの府主教位が空いていたとは断言できないし、ニフォンがそれ以前から府主教を務めていた可能性も残されている。こうして考察が一見明らかな袋小路に向かいつつあるとしても、不可能を承知でさらに奥まで進もうと奮闘することに歴史学の価値が賭されているといえなくもない。私見では、パキュメレスの史書とアタナシオスの書簡の中に、さらなる手がかりを見出すことができる。

パキュメレスの史書に関係する手がかりは二つある。一つはすでに引用した、ニフォンの名が唯一現れる文章、「(キジコスの要塞が) ちょうどそのとき同市の主教のニフォンによって組織された ἄρτι τότε συστάντι παρὰ τοῦ ἐν αὐτῇ προέδρου Νίφωνος」<sup>98</sup>である。この短く単純な分詞節の意味を著者パキュメレスが意図したとおりに受け取ることは、実のところ難しい。パキュメレスはニフォンに関して、自らが記したことよりもはるかに多くのことを知っていたはずで、ニフォンに限らず、府主教の人事全般に通じていたと思われる。なぜなら、彼は、総主教による府主教の叙階および聖別が行われる場、コンスタンティノーブルの大教会に仕える聖職者であったからである。おそらく彼は、府主教の選出人事は総主教の選出よりも重要度で劣るうえ、平凡に過ぎて記述に値しないと判断して、特別な場合を除き、それについての記述を自らの史書に含めなかったのである。彼がこのように行った情報の取捨選択は、ときおり彼の意図の把握を予想外に困難にする。ニフォンの現れる右の文章は、すでにキジコスにいたニフォンが要塞を組織したケースと、キジコスに着任したばかりのニフォンが要塞を組織したケースの二通りの読みを許す。おそらくより一般的なのは前者の読みであろうが、副詞句「ちょうどそのとき」の存在がその読みの優位と安定に揺さぶりをかける。なぜなら、もしニフォンが以前よりキジコスに赴任し

---

<sup>98</sup> Pachymeres, XI, 11.

ていたなら、「ちょうどそのとき」と記さずとも文の意味が通るからである。ビザンツ領小アジアの情勢が急速に悪化し始めたのは一二九九年から一三〇〇年にかけてであり、もしその時点ですでにキジコスにいれば、ニフォンは同市の防衛の強化にいち早く着手し、不測の事態に備えていたはずである。早くに赴任したニフォンが迫り来る危機を過小評価しており、一三〇三年七月に状況が極度に悪化してようやく防衛の指揮をとったという可能性は、ニフォンの名の後に続く、「この人は精力的で、実際的な物事に関しても宗教的な物事に関しても知恵を備えていた」<sup>99</sup>という説明によって否定される。パキュメレスは「ちょうどそのとき」と記すことで、ニフォンの到来がキジコスの住民にとって希望の光となったことを読み手に伝えようとしているのではなかろうか。これに関して想起されるべきは、キジコスとニフォンに関する記述が「全般的荒廃と避難について」と題された節の末尾に置かれ、さらにオリーブの若枝のエピソードの後に続いていることである。

もちろん、パキュメレスがとくに意識することなく「ちょうどそのとき」と記した可能性もあるし、絶妙のタイミングでニフォンが到来したのであれば、パキュメレスはそのように記述したはずという反論も可能である。けれども、第二の読みが今日のみならず、当時においても非現実的でなかったことは、一四世紀末から一五世紀初にかけて成立したパキュメレスの史書の別バージョンが明らかにする。これは名称不明の人物がオリジナル版をもとに作成した短縮版であり、最近、ファイエによって全体の校訂版が刊行された。ここでは、ニフォンの名を含む一文は次のように書き換えられている。「ちょうどそのときニフォンが同市の主教に据えられた ἄρτι τότε καταστάνας αὐτῇ προέδρου Νίφωνος」<sup>100</sup>。成立年代の開きから、短縮版の作者が当時の状況を正確に把握して書き換えたとは想定しがたく（不可能ではないが）、むしろ、彼の読みがそこに直に反映されていると考えるべきであろう。

彼の史書にあるもう一つの証拠は、ヨアネス・コスマスによる府主教人事に関するものである。パキュメレスは、一二九四年のヨアネスの総主教選出に関連して、彼の主教人事の傾向に言及している。大教会の聖職者が名誉ある主教位を得ることはそれまで慣例であったが、パキュメレスによれば、ヨアネスは教会法を盾に彼らの要望を黙殺し、修道士を優先的に登用した<sup>101</sup>。この記述だけを見れば、ヨアネスがラウラ修道院長であるニフォン

<sup>99</sup> Pachymeres, XI, 11.

<sup>100</sup> Georgios Pachymeres, *La version brève des Relations historiques*, vol. 2 : *Livres VII-XIII*, ed. A. Failler (Paris, 2002), 100 (text) and 244 (commentary).

<sup>101</sup> Pachymeres, VIII, 28.

を登用した可能性も開けてくるが、パキュメレスは相反する情報を別の箇所で提示している。エフェソス府主教ケイラスの復権をめぐって総主教と対立した主教らは、ヨアネスを指弾する内容の文書を皇帝に送付した。現存しないこの文書で総主教の問題の一つとして指摘されたのは、総主教が府主教位を長期間空位のままにするというものであった<sup>102</sup>。これら二つの情報はいずれも事実とみなしうる。彼は当初こそ修道士を優先的に選出していたが、おそらくはトルコ人勢力の台頭にともない総主教座の財政が悪化したため、新たな府主教の選出を停止したのである<sup>103</sup>。もしこの想定が正しければ、ヨアネスの在位期後半にニフォンが府主教に任じられた可能性は低いと結論づけることができる。

同じく重要な状況証拠を供するのは、アタナシオスの書簡、とくにラウラ修道院の内紛を受けて書かれた書簡である。アタナシオスのいくつかの書簡は、彼の二度目の在位期に、ラウラが深刻な内部問題を抱えていたことを明らかにする。ここで重要になるのは問題の推移ではなく、原因である<sup>104</sup>。ラウラで発生したのは、その上長に対する修道士の不一致であった。一三〇四年から翌年にかけて、一部の修道士が院長のマキシモスに反抗を続けた結果、マキシモスやアタナシオスのかつての弟子マラキアスら、指導的修道士は総主教に使者を派遣し、救援を要請した。マキシモスは一三〇四年八月のマリア・アンゲリナの寄進証書にも院長として現れているが、この時点で、彼の司るラウラでは深刻な内紛が進行していたと思われる。

ところで、マキシモスはいつからラウラの院長を務めていたのか。マキシモスの名に直接言及する史料は、マリア・アンゲリナの証書とアタナシオスからラウラに送られた書簡（Laurent, *Regestes*, no. 1615）の二点のみであるが、ローランは、アタナシオスの別の書簡（no. 1596）がラウラおよびマキシモスに関係していると推測している。この書簡はアタ

<sup>102</sup> Pachymeres, X, 11.

<sup>103</sup> 帝国領小アジアの崩壊は国家財政のみならず、総主教座財政にも深刻な打撃となったはずである。それによって、小アジアにある総主教座の附属財産からの収入、および各主教座に設定された総主教座への上納金が大幅に減じたであろう。実際、アタナシオスの二度目の在位期の後半には、彼は深刻な財政難を理由に、大教会聖職者への俸給を半額に削減している。当然、この措置は彼らの強い反発を招いた。J.L. Boojamra, *Church Reform*, 129-34. ビティニア地方における総主教座の財産については、V. Kravari, 'Evocations médiévales', in: B. Geyer and J. Lefort eds., *op.cit.*, 88-9 を参照。皇帝ミカエル八世は一二七〇年頃に金印勅書を発行し、総主教座の全財産および総主教座のそれらに対する権利を確認している。Jus graecoromanum, I, ed. I. Zepos and P. Zepos (Athens, 1931), 659-66; Dölger, *Regesten*, no. 1941a (=1956). ちなみにクラヴァリが上記論文で紹介しているのは、同勅書の一部。

<sup>104</sup> 詳しくは P. Lemerle, 'Chronologie de Lavra de 1204 à 1500', in: *Actes de Lavra*, IV, 22-5 を参照。

ナシオス自身が作成した修道院規則（ヒュポテュポシス）とともに、ある修道院長に宛てられたもので、その選出に対する総主教の確認と彼への指導を内容としている<sup>105</sup>。ローランの見解では、この書簡は、一三〇三年後半から翌年にかけてラウラの院長に選出されたマクシモスに送られたものである<sup>106</sup>。書かれた時期がローランの考えるとおりの一三〇三年後半から翌年にかけてであるなら、ラウラの内紛はその時期にはすでに無視できない局面に達していたことになる。なぜなら、皇帝に直属するラウラの院長の選出ないし確認は、総主教の通常の管轄に含まれていなかったからである。アタナシオス自身も、ラウラが無秩序な状態に陥っていたことを示唆する。件の書簡が修道院規則とともに送付され、アタナシオスが同規則を厳守すべきと説いている点もそれを裏付ける証拠とみなしうる<sup>107</sup>。

なぜラウラは秩序を欠いた状態に陥ったのか。もっとも妥当と思われるのは、修道院長の選出に絡んで対立が生じた可能性である。ローランの基本的推測を受け入れた場合、ラウラではマクシモスの選出に先立つある時期、人選をめぐる深刻な対立が生じていたことになる。結果的にマクシモスが選出された後も、一部の修道士が不服として反抗的姿勢を示したため、マクシモスを支持する修道士らは総主教アタナシオスに人事の確認を依頼し、アタナシオスの権威を用いて事態の沈静化を図ろうとした。アタナシオスの介入によって内紛は収束したかに思われたが、一部修道士の反抗が再び生じたため、マクシモスはマラキアスら指導的修道士と協議し、救援を求めるべく使者を首都へ急派した。ローランに従いつつ、一連の経緯を再構成すれば以上になるだろう。

ラウラの内紛そのものはマクシモスの修道院長としての資質、あるいは史料の伝えない院内の党派対立が原因となって生じた可能性が高い。しかし実際のところ、マクシモスに上長としての資質が大きく欠けていたかどうかは定かではない。マクシモスがマラキアスとともにラウラ内部での親アタナシオス派を構成し、反アタナシオス派あるいはアルセニオス派の修道士と対立していた可能性もなくはないが、これも史料的な制約から単なる憶

---

<sup>105</sup> このヒュポテュポシスのテキストは英訳と別個に刊行されている。T. Millar and J. Thomas, 'The monastic rule of Patriarch Athanasios I: An edition, translation and commentary', *Orientalia Christiana Periodica* 62 (1996), 353-71; T. Millar, 'Athanasios I: Rule of Patriarch Athanasios I', in: J. Thomas and A. Constantinides Hero eds., *Byzantine Monastic Foundation Document*, IV (Washington, D.C., 2000), 1495-1504.

<sup>106</sup> Laurent, *Regestes*, no. 1596. テキストの編者であるミラーとトーマスもローランの見解を受け入れている。T. Millar and J. Thomas, op.cit., 355-6.

<sup>107</sup> アタナシオスの修道院改革の実態については、J.L. Boojamra, *Church Reform*, 149-79 に詳しい。

測に留まる<sup>108</sup>。それ以外に内紛の原因として考えられるのは、集団の統率にとりわけ秀でた修道院長の突然の退位にともなう混乱である。

その名は関係史料にまったく現れず、そう考える研究者も皆無であるが、ニフォンがマクシモスの前任者であった可能性は無視できない。実際、いくつかの間接的な証拠を挙げることが可能である。まず、ニフォンとマクシモスの間に、第三のラウラ修道院長が在位していたことを示す史料は知られていない。次いで、時期的符号である。ローランの研究にもとづけば、ラウラの修道士らがマクシモス選出の確認を総主教に求めたのは、一三〇三年の夏から翌年にかけてであり<sup>109</sup>、この年代は、一三〇三年六月に復位したアタナシオスがニフォンを召喚した結果、ラウラにおいて新院長の選出が必要になったという可能性を否定しない。最後は、ニフォンの諸事における鋭敏さである。上長ないし管理者としてのニフォンの才能は、独自の視点で同時代を見つめたパキュメレスも、『年代記』の著者エフライムも、ニフォンへの罵言を連ねるグレゴラスも、等しく認めている<sup>110</sup>。また、マリヤ・アンゲリナの証書から、ラウラ修道院長時代の彼の影響力はアトス山外にまで及んでいたことが確認されている。かりにこのニフォンが、一二九四年十一月以前のある時点から、一三〇三年初夏まで、その卓越した能力をもってラウラを統率していたとすれば、アタナシオスによる彼の登用は、同等に特別な上長を選ぶのが困難であるという点で、修道士らに大きな衝撃を与えたはずである。しかもアタナシオスがニフォンをキジコスに送ったとすれば、小アジアの情勢が緊迫していたことから、連絡と移動は間髪を容れずに行われたはずであり、ニフォンは後任の人選に関する修道士らの合意を形成することなく、慌しくラウラを離れたであろう。この場合、大修道院であるラウラにおいて、いわゆる権力の真空が発生し、後任の院長と主導権をめぐる修道士の党派対立が一挙に表面化したとしても不思議ではない。

ニフォンの府主教選出の詳細について進みうるのはここまでであろう。あらかじめわかっていたこととはいえ、文字の空白の中に飛躍することはできない。ニフォンは一二九四年十一月の時点でラウラ修道院長であり、一三〇三年七月の時点でキジコス府主教であった。この二つの点の間に広がるニフォンの生の空白は、その周辺にも及んでいる。この間、

---

<sup>108</sup> アタナシオスがラウラの内政に関与する姿勢を示したことが、問題を悪化させた可能性もある。

<sup>109</sup> Laurent, *Regestes*, no. 1596.

<sup>110</sup> ニフォンの賢さは、一三三〇年代に彼と面会したマリノ・サヌード・トルセッロからも言及されている。注二九を参照。

ラウラ修道院長もキジコス府主教も、現存する既知の史料にはまったく姿を現さない。一三〇三年六月に復位したアタナシオスが、ニフォンをラウラ修道院長からキジコス府主教に昇格させたというここでの仮説は、現時点で、この空白に対するもっとも理にかなった説明を与えるものであろう<sup>111</sup>。

#### 第四章 アタナシオスとの確執とその背景

当然のことだが、ニフォンの伝記的空白は彼の生の無意味さを意味しない。彼が特別な能力の持ち主であったことは間違いなく、彼が高位の職務を連続して引き受けているのは、グレゴラスのいうとおり、彼のその生来の個性によるものであったかもしれない。彼がラウラの院長に任じられていることは、彼が当時のラウラに暮らした多数の修道士あるいは指導的修道士の一団によって選ばれたことを意味し、府主教時代以降の証拠とあわせて考えると、おそらく彼は院長に就任する以前から、管理者としての才能を院内で発揮し、周囲から評価されていたのであろう。また、彼がラウラでの日々の経験を通じて、もともとある才能にいつそう磨きをかけ、それを卓越した水準にまで高めたことも想像できる。いずれにしても、一三〇三年の夏、彼は主教でありながら、軍司令官のようにキジコス市の防衛を指揮し、要塞に避難した住民をトルコ人勢力のさらなる攻撃から救うことができた。パキュメレスはこのニフォンの活躍に強い感銘を受け、その名にふれるとともに、好意的な人物評を付したのであろう。

このときのニフォンの活躍に彼のラウラ修道院での指導経験が反映されていることは疑いないが、注意しなければならないのは、たとえ卓越した上長であったとしても、ラウラの院長が自動的に高位の府主教位を授与されたわけではない点である。アタナシオスが総主教になっていなければ、ニフォンはラウラかその周辺で生涯を終えていた可能性が高い。より明確に言えば、アタナシオスが教区民への実際の司牧活動を重視し、大教会聖職者の

---

<sup>111</sup> 第二章の終わりで、ニフォンとテッサロニキ府主教ヤコボスがともにラウラ修道院に恩恵を授与していたことを指摘したが、両者には、史料に現れるタイミングというもう一つの共通点がある。すなわち、ヤコボスと思しきテッサロニキ府主教の在位が最初に確認されるのは、アタナシオスの最初の総主教就任の一ヵ月後である一二八九年十一月、一方、ニフォンがキジコス府主教として最初に確認されるのは一三〇三年七月、アタナシオスの復位から同じく一ヵ月後である。ヤコボスが言及されるのはラウラへの証書、ニフォンはパキュメレスの史書と、史料の性質は異なるものの、いずれもラウラ修道院長の経験者である彼らが、アタナシオスの二度の総主教就任の直後に主教として確認されることは果たして偶然であろうか。アタナシオスの時代以前、ラウラの院長が、職位の高低にかかわらず、主教を務めた事例がほとんど確認できないことも想起されるべきであろう。

優先された従来の主教人事を一新したことで、アトスにあって何百人もの修道士を監督するラウラの院長が、有力な主教候補として現れたのである。ニフォンを実際に任じたのがアタナシオスであれヨアネス・コスマスであれ、一三〇三年の夏の時点での彼は、羊飼いたる主教は羊の群れである信者を身命を賭して守るべきというアタナシオスの理想を体现する存在であった。かりに前章で議論したとおり、ニフォンを任じたのがアタナシオスであったなら、アタナシオスは自らの判断の正しさを確信したであろうし、そうでなくとも、キジコス防衛の知らせは彼を大いに喜ばせたであつたろう。つまり、アタナシオスが総主教座に戻り、ニフォンがキジコス市を防衛した一三〇三年夏の時点では、両者の関係を毀損する要素はいまだ顕在化していなかったのである。

このようにニフォンが狼から群れを守るよき羊飼いとして、アタナシオスの期待にこたえる主教であったすれば、アタナシオスの在位末期に生じたと思しきニフォンへの疑惑と彼に対する総主教の追求はいかに理解されるべきであろうか。ニフォンがよき羊飼いであったのは一三〇三年夏のみで、その後すぐに彼はグレゴラスが描くような悪辣な主教になったのか。アタナシオスがアルセニオス派のシスマの解消に向けた策謀を察知し、それに加担していたニフォンの失脚を狙ったのか。それとも、ニフォンがある時点で、意図的であれ、不注意であれ、規則から逸脱した行動をとったのか。タルボットはこの問題について、ニフォンが一三一〇年に総主教に就任し、シスマを速やかに解決したという事実に依拠し、二つ目の陰謀説を有力と考えているが、以下では、事後結果のみならず、ニフォンのキジコス府主教としての経験にも着目し、問題の実相に迫りたい。これには再び空白に問いを発し、そこに飛び込むにはいたらないにせよ、それがいかなる性質のものか、周囲から慎重に探ることが必要となる。キジコス府主教としてのニフォンの活動をはっきりと示す史料は、すでに検討したパキュメレスの史書、マリア・アンゲリナの一三〇四年の証書、そしてアタナシオスの書簡の一部に添えられた題目、これらだけであるが、キジコスに関係するその他の史料にもとづいて、ニフォンの主教としての経験を推論することは不可能ではない。

#### ・持ちこたえたキジコス

最初に問題となるのは、一三〇三年の夏以降、ニフォンがキジコスにおいて果たした役割である。アタナシオスの復位から程なく、キジコスが深刻な危機に見舞われたとき、彼は確かに同市にいて、おそらくは軍司令官の不在から、自ら防衛の陣頭指揮をとって市民



を守った。一方、ニフォンの疑惑に関して書かれたアタナシオスの書簡は、アタナシオスがニフォンを裁判にかけようと考えていたとき、ニフォンが首都にいたことを明らかにする<sup>112</sup>。この間のニフォンの動向を明記する史料はマリア・アンゲリナの証書のみであるが、これはテッサロニキ地方に暮らすマリアの寄進に関するもので、キジコスに直接関係する証拠ではない。一三〇三年の夏以降も彼はキジコスに留まっていたのだろうか。

ニフォンの居場所を考えるうえで重要になるのは、アタナシオスの改革とキジコスの危機である。前者について想起されるべきは、アタナシオスがとりわけ二度目の在位期、主教らが長期間首都に滞在することを望まず、彼らを教区に送り返すために、皇帝にたびたび嘆願するなど様々な手段を講じたことである<sup>113</sup>。たとえば、クレタ府主教やサルディス府主教はアタナシオスから直接書簡を送られ、首都からの退去を勧告されているし<sup>114</sup>、ほかにも、何人もの主教が皇帝宛ての書簡で彼に名指しされ、正当な理由なく首都に留まり教会の秩序を乱していると非難されている<sup>115</sup>。しかしニフォンの名もキジコスの地名も、この主教の居住地の問題に関してはアタナシオスの書簡の中に現れない。これは、一三〇三年夏の事件についてのパキュメレスの報告が与える、アタナシオスの理想にかなう主教というニフォンのイメージと矛盾しない。もしニフォンが一三〇三年夏以降のある時点で、生活の拠点をキジコスから首都に移したとすれば、それはまぎれもなくアタナシオスの理想に反する行為であり、彼はアタナシオスが非難した主教のリストの中に含まれていたであろう<sup>116</sup>。

---

<sup>112</sup> Talbot, no. 89, ll. 28-9.

<sup>113</sup> 詳細については筆者の博士論文の第三章を参照。

<sup>114</sup> クレタ府主教宛ての書簡は E. Patedakis, *op.cit.*, no. 7; Laurent, *Regestes*, no. 1627、サルディス府主教宛ての書簡は E. Patedakis, *op.cit.*, no. 8; Laurent, *Regestes*, no. 1750。このほかアパミア府主教宛ての四通の書簡が残っている。E. Patedakis, *op.cit.*, nos. 3-6; Laurent, *Regestes*, nos. 1742-1745.

<sup>115</sup> アタナシオスの最大の攻撃対象はアレクサンドリア総主教アタナシオス二世である。たとえば、皇帝を宛て先とするタルボット版の六九番書簡では、首都に居座る主教として、アレクサンドリア総主教、アンティオキア総主教、カルケドン府主教、サルディス府主教、ペルガモン府主教の五名が非難されている。

<sup>116</sup> 皇帝宛てのタルボット版二五番書簡では、首都に留まって経済活動に手を染めているとしてビジネ府主教とサルディス府主教が非難され、教区に留まっているとしてフィラデルフィア府主教とニンフェオン府主教が称賛されている。後者の二名が言及されているのは、一三〇四年春に、キジコスを発したカタロニア傭兵団がフィラデルフィアとニンフェオンに進軍した事実と関係があるかもしれない。当時、フィラデルフィアはトルコ人勢力によって攻囲されていたが、傭兵団の手で解放された。Ramon Muntaner, *op.cit.*, 496-7. ちなみに解放まで同市の防衛を指揮したのは府主教のテオレプトスであった。Talbot, no. 25, commentary 20-21 (p. 333-4).

アタナシオスの二度目の在位期には、ニフオンの居場所に関する史料があと二点ある。いずれも教会会議の参加者リストを含むもので、一つは、一三〇四年一〇月の年代を持つ新法ネアラの草案<sup>117</sup>、もう一つは一三〇五年から翌年にかけて、アルセオス派の司祭ヨアネス・ドリミスの陰謀の発覚を受けて開かれた教会会議の決議を知らせるべく、アタナシオスが皇帝に送った書簡（タルボット版、八一番）<sup>118</sup>である。前者には二〇人近くの、また、緊急事態を受けてたまたま首都にいた主教を集めて教会会議を行ったとアタナシオスが明かす後者には、一〇人の主教の地位が記入されているが、キジコス府主教はそのいずれにも含まれていない。もちろん、彼が病気やその他の理由で首都にいながら二つの教会会議に出席しなかった可能性も排除できないが、アタナシオスが首都に留まる主教としてニフオンを非難した形跡がないこととあわせて考えると、ニフオンが現地での司牧の務めを重視した主教であったことはほぼ確実であろう。

当時のニフオンに期待されていたのは、通常の司牧の責務を越える仕事、すなわち、キジコスの信徒を外敵から身を挺して守ることであった。すでに見たとおり、パキュメレスの報告は、ニフオンが一三〇三年夏にキジコス市の防衛を指揮したことを示唆するが、キジコスの危機はその後も継続しており、ニフオンに対するパキュメレスの好意的な人物評には、ニフオンの一時点ではなく、長期間の活躍が反映されている可能性もある。

キジコスの危機が一時的なものでなかったことは、第一章で簡単に言及したその後の経緯が明らかにする。すなわち、トルコ人勢力によって攻囲されたキジコスに、救援のための軍隊が同年夏から秋にかけて二度派遣されたのである。最初の救援は、小アジア南西ですでにトルコ人勢力と対峙していたミカエル九世によるものであり、彼はキジコスに接近するも、いかなる理由によってか交戦を避けて、キジコス西方のペガイに駐留した。ここでミカエルは重病を患い、軍隊を指揮することができなくなったため、ミカエルにキジコスやヘレスポントス、ビティニア地方一帯を鎮定させようとした皇帝の目論見は挫かれた<sup>119</sup>。二度目の救援は、九月にシチリアのメッシーナから到来したカタロニア傭兵団によっ

<sup>117</sup> Laurent, *Regestes*, no. 1607

<sup>118</sup> Talbot, no. 81. この教会会議に出席した一〇名は、言及の順に、サルディス、カルケドン、ペルガモン、ビジネ、アキラウスの府主教、クリストゥポリスとデルコスの大主教、ライデストスとカリウポリスの主教。この事件については、A. Failler, 'Le complot antidynastique de Jean Drimys', *REB* 54 (1996), 235-44などを参照。

<sup>119</sup> ミカエル九世は小アジア南西部の防衛に失敗して、ビティニア地方に向かった。キジコスを攻囲したトルコ人勢力との対決を避けた理由としては、軍隊の士気と戦闘力が低下しており勝利が見込めなかったこと、彼自身の体調がすでにすぐれなかったこと、などが考えられる。ラモン・ムンタネールが述べるところでは、傭兵団がキジコスの解放に成功し

て行われた。皇帝がキジコスの救援を二度にわたって試み、しかも帝国内での戦績のない傭兵集団まで利用しているという事実は、キジコスの軍事危機の深刻さはもとより、ビティニアのトルコ人勢力のこの時点での征服目標がキジコスないしはアルタキ岬全体であったことを示す<sup>120</sup>。

九月から一〇月にかけて、キジコスに上陸した傭兵団は市外に陣取るトルコ人勢力を撃破することに成功し、翌年四月に小アジアの南西に向けて進軍するまでキジコスに逗留した<sup>121</sup>。したがって、傭兵団が到来するまでの二、三ヵ月の間、ニフォンが攻囲されたキジコスにあって、指導的役割を果たしていたであろうことは想像に難くない。キジコスの危機は傭兵団の到来をもってしても終わらなかったであろう。トルコ人勢力に勝利したといっても戦闘は市外で一度行われただけであり、一一月から始まった本格的な降雪がさらなる攻撃の妨げとなった。市内に目を移せば、キジコスは冬の間、パキュメレスによれば八千人もの外国人兵士を抱え込まなければならなくなった<sup>122</sup>。パキュメレスはこの間の住民の被害の大きさを、傭兵団に随行したラモン・ムンタネールはロヘールの兵士と住民双方への気前の良さを強調しているが、実際、どれだけ平穏に冬が過ぎたのかはわからない<sup>123</sup>。

一三〇四年四月に傭兵団が出発した後は、キジコスは再度、トルコ人の陸からの攻撃に独力で対処しなければならなかったはずで、平和とは程遠い状況にあった。ロヘールがミカエル九世によって殺害された一三〇五年の春以降は、さらなる危機がキジコスに降りかかることになった。傭兵団は帝国に対して公然と反旗を翻し、ミカエルの軍隊と対決するとともに、ダーダネルス海峡の要衝カリウポリス（ガリポリ／ゲリボル）に拠点を置いて、帝国の都市や村落を襲撃し始めたのである<sup>124</sup>。マルマラ海に面するキジコスも例外ではなく、一三〇五年五月に傭兵団の攻撃を受けた<sup>125</sup>。傭兵団はキジコスの占領と略奪を狙って攻撃を仕掛けたのであろうが、パキュメレスによれば、住民らの抵抗にあって撤退したという。これ以降、傭兵団がキジコスを襲ったとする報告はないが、強力な艦隊を有する彼

---

たことで、ミカエルは彼らに敵愾心を燃やしたという。Ramon Muntaner, *op.cit.*, 491.

<sup>120</sup> ラモン・ムンタネールの報告を信じれば、トルコ人らはアルタキ岬の肥沃な土地を狙っていた。この岬の付け根の部分には城壁があり、そこでトルコ人の半島内への侵入は阻まれていた。Ramon Muntaner, *op.cit.*, 489-90.

<sup>121</sup> Pachymeres, XI, 21; Ramon Muntaner, *op.cit.*, 491-6.

<sup>122</sup> Pachymeres, XI, 12.

<sup>123</sup> Pachymeres, XI, 14; Ramon Muntaner, *op.cit.*, 494-6.

<sup>124</sup> いわゆるカタロニア危機については、A.E. Laiou, *Constantinople and the Latins*, 134-77 を参照。

<sup>125</sup> Pachymeres, XII, 25.

らの存在は、彼らがコンスタンティノーブルの征服を断念してペロポネソスに転進する一三〇七年の夏まで、キジコスにとって深刻な脅威であり続けたであろう。このように、ニフォンが防衛を指揮した一三〇三年の夏以降、キジコスは恒常的な防備を必要とする、困難かつ不安定な状況に置かれており、とりわけ一三〇三年の夏と一三〇五年の春には深刻な危機に見舞われた。一三〇四年や一三〇五年から六年にかけての教会会議にニフォンが参加しておらず、赴任以来、極力現地に留まるを選択していたとすれば、それはおそらく、ニフォン自身が主教としての宗教的責務を真摯に引き受けていたからであろうし、危難の時代にあって、自らの指導力がキジコスの住民にとって不可欠であると自覚していたからであろう。

#### ・アルセニオス派のシスマ

次いで問題とすべきは、ニフォンとアルセニオス派との関係である。総主教となったニフォンが一三一〇年にシスマを解決に導くことができたのは、彼とアルセニオス派のいかなる関係に起因するのであろうか。彼が当初からアルセニオス派の一員であった可能性はまずない。というのも、彼をキジコス府主教に任じた可能性が高いアタナシオスも、その前任者であるヨアネス・コスマスも、頑強な反アルセニオス派として知られており、主教の任命権を有する彼らが、アルセニオス派として公然と活動する人物や、表立った活動はしないにせよ、シスマ勢力に同情的であることが噂される人物を主教に登用したはずがないからである<sup>126</sup>。アルセニオス派は教会から分離したうえで、解任された総主教アルセニオスの復権（名の記念）とアルセニオス派による正教会の支配を一貫して要求していた<sup>127</sup>。反アルセニオス派の総主教であるアタナシオスやヨアネスにとって、こうしたシスマ勢力の主張は到底容認できるものではなく、アルセニオス派の人物の登用は自らの総主教権威を内側から掘り崩し、教会の中に新たな不和の種を撒くことを意味した。したがって、ニ

---

<sup>126</sup> 総主教ヨアネス・コスマスがアタナシオスと同様、明確に反アルセニオス派の立場に立つ総主教であったことは、皇帝アンドロニコスがアルセニオス派の貴族ヨアネス・タルカネイオテスに小アジア遠征を命じた際、彼が強い反対を表明したという事実から読み取れる。Pachymeres, IX, 25. 実際、彼はミカエル治世に総主教ヨセフと同じ修道院に暮らしていたことがあり、皇帝の聴罪司祭を務め、次いで総主教に就任したのは、彼がアルセニオス派に対抗するヨセフ派の修道士であったからであろう。ミカエル治世にアンドロニコスの戴冠式を行ったのは総主教ヨセフであり、アルセニオス派は総主教ヨセフの正統性を否定することで、アンドロニコスの正統性をも疑問視していた。

<sup>127</sup> アルセニオス派の要求は文書の形で現存している。V. Laurent, 'Les grand crises religieuses à Byzance', 285-92.

フォンは、ラウラの修道院長経験者であったことに加え、アルセニオス派の一員でも明らかな同情者でもなかったことで、主教に任じられたのである。

この任命はニフォンにアルセニオス派の問題を熟考する機会を供したと思われる。というのも、第一に、アルセニオス派はビザンツ領小アジアにおいて多数の活動家と協力者を見出したからであり、第二に、ニフォンは身の安全が保証される首都ではなく、外敵の攻撃にさらされたキジコス市に暮らすことを選択したからである。しばしば指摘されていることだが、アルセニオス派のシスマは、いわゆるニケーア帝国の経験と密接なつながりがあり、軍人として台頭したミカエル・パレオロゴスおよび彼の帝国支配に対する小アジア住民の全般的反感が背景にあった。ミカエルはニケーア時代の一二五九年、軍事クーデタを起こして幼帝ヨアネス・ラスカリスの共同皇帝に就き、一二六一年にコンスタンティノープルを奪回した後は、ヨアネスを廃位してパレオロゴス家による帝国支配を固め、自らに破門を宣告した総主教アルセニオスを追放して別の総主教を擁立した。ミカエルのこうした専横に抗して政治運動を開始したのが、アルセニオスを支持する小アジアの下級聖職者や修道士勢力であった<sup>128</sup>。彼らの活動はミカエル治世は非合法とされ、過酷な弾圧の対象となったが、後継者であるアンドロニコスはアルセニオス派に対して融和的な方針をとったため、彼らは小アジアと首都を中心にその活動を再度本格化させていた<sup>129</sup>。

発生から数十年を経ても一向に終息の気配を見せないこのシスマは、首都で国家と教会を統括する皇帝と総主教にとって深刻な問題であったが、小アジアの教区で司牧の任に当たる主教にとってもそれは同様であった。アルセニオス派の司祭や修道士らは教会の許可なく各地で独自の司牧を展開し、住民に教会からの離反を促し、地域社会における宗教的分断を深刻化させていた。小アジアの教区において主教が直面したこうした困難については、フィラデルフィア府主教テオレプトスが現地の教会で信徒を前に行った説教がもっとも明白な証拠となる<sup>130</sup>。一二八〇年代前半にエフェソス府主教に任じられ、一定期間現地に滞在したヨアネス・ケイラスが反アルセニオス派の文書を残していることも示唆的であ

---

<sup>128</sup> Pachymeres, IV, 28.

<sup>129</sup> ミカエル治下、アルセニオス派の弾圧に従事したのはゲオルギオス・アクロポリテスである。Pachymeres, IV, 28.

<sup>130</sup> R.E. Sinkewicz, 'A critical edition of the anti-Arsenite discourse of Theoleptos of Philadelphia', *Mediaeval Studies* 50 (1988), 46-95. Cf. idem, 'Church and society in Asia Minor in the late thirteenth century: The case of Theoleptos of Philadelphia', in: M. Gervers and R.J. Bikhazi eds., *Conversion and Continuity: Indigenous Christian communities in Islamic lands, eighth to eighteenth centuries* (Toronto, 1990), 355-64.

る<sup>131</sup>。小アジアの教区に赴任した主教は、トルコ人の攻撃が本格化する以前においては、教区内におけるアルセニオス派の活動に対処し、宗教的秩序を維持する必要に迫られていたのである。

小アジアの主教がアルセニオス派の活動に悩まされるという構図は、トルコ人の攻撃が最大の脅威となった後も、さして変化しなかったであろう。ヨアネスの在位期末期、首都では一時、皇帝とアルセニオス派の間で和解交渉が行われたものの、結局、アルセニオス派の総主教が擁立されることはなく、ヨアネスと同等にアルセニオス派に敵対的なアタナシオスが復位した<sup>132</sup>。したがってこの時期、小アジアの教区に留まっていた主教らが、従来から続くアルセニオス派の活動に加えて、トルコ人の熾烈な攻撃にも対処しなければならないという、二重の困難に面したことは疑いない。ニフォンが府主教として赴任したのは、まさにこの時期のキジコスであった。ニフォンはキジコスに留まり、要塞に避難した住民とともに危機に立ち向かうことを選択した。推測の域を越えるものではないが、もし避難した住民の中にアルセニオス派が紛れ込んでいた場合、ニフォンは間近で彼らに対処せねばならなかったであろうし、そうでなくとも、住民を指導するかたわら、なぜ帝国の小アジア全体がかくも深刻な状態に陥っているのか自問を重ねたであろう。この推測に関して再度想起されるべきは、パキュメレスの評言である。「この人は精力的で、実際の物事に関しても宗教的な物事に関しても知恵を備えていた」。シスマが致命的要因の一つであることは、聖職者として現地に留まるニフォンには厳然たる事実と感じられたのではなかろうか。首都にいる総主教のアタナシオスは、シスマ勢力に対して改心と教会への速やかな回帰を促すばかりで、彼の側から妥協することは頑なに拒んでいた。その内的亀裂を回復できないまま、小アジア社会は破局へとひた走っていた<sup>133</sup>。

#### ・声望と疑惑

アタナシオスがニフォンの疑惑について皇帝に書簡を送ったとき、ニフォンはコンスタ

---

<sup>131</sup> Ioannes Cheilas of Ephesos, *Sur le Schisme Arsénite*, in : J. Darrouzès ed., *Document inédits d'ecclésiologie byzantine* (Paris, 1966), 340-413 and 86-106.

<sup>132</sup> Pachymeres, X, 33.

<sup>133</sup> 総主教アタナシオスとアルセニオス派の関係については、A.-M.M. Talbot, 'The Patriarch Athanasius and the Church', 20-1; J.L. Boojamra, *Church Reform*, 139-48 を参照。アタナシオスは二度目の在位期間中に、アルセニオス派を非難する内容の長大な書簡を作成している。E. Patedakis, *op.cit.*, no. 2, 171-95 (text); 196-221 (commentary); Laurent, *Regestes*, nos. 1737 and 1738.

ンティノーブルにいた。アタナシオスの言を信じれば、ニフォンは聖像に対する不正を働いたとして、ある修道士から告発を受けていた<sup>134</sup>。この問題に関して、アタナシオスの書簡集には皇帝宛の二通と名称不明の主教宛の一通が含まれ、少なくとも、アタナシオスがこの問題を重大視していたことが窺える。しかし、ニフォンをめぐるこの疑惑は、パキュメレスの好意的な評言や、ニフォンがアタナシオスの理想にかなう主教であったという印象と不釣り合いのように思われる。逆に、この疑惑と関係があるように見えるのは、グレゴラスの一連の批判的記述である。

グレゴラスの記述との関係を探る前に、それ以外の史料にもとづいていくつかの点を確認しておこう。まず、パキュメレスの史書に記述がないことから、この疑惑が、史書の終点である一三〇七年夏以降に生じたことが示唆される。次いで、アタナシオスの意向に反して、アルセニオス派との和解を模索する勢力がいた<sup>135</sup>。そして、皇帝はニフォンへの裁判が実施されることを望んでおらず、アタナシオスの要請を聞き入れなかった<sup>136</sup>。最初の点は、ニフォンが疑惑が生じた時点でコンスタンティノーブルにいたという事実によっても支持されるだろう。ニフォンは一三〇三年夏以降、キジコスの防衛に追われ、とりわけカタロニア傭兵団がペロポネソスへ向けて出発する一三〇七年夏まで、同地を離れにくい状況にいた。いい換えると、一三〇七年の夏以降、キジコスの危機が多少緩和され（陸上の防衛に専念できる状況となった）、しかも、マルマラ海の安全が大幅に増したことで、ニフォンは希望すればコンスタンティノーブルに容易かつ安全に旅することができた。二つ目の点は、シスマを解決するという明白な意図を持って、皇帝とその周辺の人々が水面下で動き始めたことを示すと見てよいだろう。三つ目の点は、タルボットのように、皇帝がニフォンをアタナシオスの後任候補に計算していたと解することもできるし、もっと単純に、ニフォンが皇帝から大きな信頼を置かれる存在になっていたとも解せる。いずれにせよ、この時点のニフォンには、皇帝の力で自らへの裁判を阻止ないし延期させるに値する何かがあったのである。

これらの点を踏まえてグレゴラスの記述を読むと、キジコス府主教時代のニフォンに関連すると思しき情報がいくつか見出せる。第一に、彼が管理能力に長け、経済的な問題に

---

<sup>134</sup> この修道士の名は不明であるが、アタナシオスが彼の死の可能性に言及しているので、老齢の人物であったのかもしれない。Talbot, no. 95, l. 30.

<sup>135</sup> Talbot, no. 105, ll. 3-9 and commentary 4 (p. 433).

<sup>136</sup> タルボットの解釈にしたがえば、アタナシオスは裁判の実現に自らの進退を賭けていた。Talbot, no. 105, commentary 13-16 (p. 433).

精通していたこと、第二に、女子修道院に関心を持っていたことが契機で、二つの女子修道院の管理を委託されたこと、第三に、社交的な振る舞いによって権威者に取り入るのが巧みであったこと。この中でとくに重要なのは、具体的な施設名が言及される二点目である。ニフォンに委託されたのは、ペルゼとクラタイウの二つの女子修道院で、いずれもコンスタンティノーブル市内に位置した。ペルゼは総主教グレゴリオス二世時代に存在していたことが確認され<sup>137</sup>、クラタイウは貴族女性、アンナ・コムネネ・パレオロギナ・ストラテゴプリナによって一二九〇年代ないし一三〇〇年代に創始されたと推定されている施設である<sup>138</sup>。グレゴラスはこれら二つの女子修道院がニフォンに委託された経緯については、彼が女子修道院に関心を有していたためとしか記さないが、委託されたのが総主教就任よりも前、委託者が皇帝アンドロニコスであったのは確実である。というのは、アンドロニコスは自らの知友である高位聖職者や修道士らに首都での居住地および収入源となるよう、修道院を授与していたからであるし、首都での居住地や収入源を必要とするのは、総主教座内に暮らすことが期待された総主教というよりむしろ、地方出身で首都に生活基盤を持たない聖職者や修道士であったからである<sup>139</sup>。たとえば、一二八〇年代に修道士として首都を訪れた後の総主教アタナシオスは、アンドロニコスに面会した後、クセロロフォス丘のメガス・ロガリアステス修道院を居住地として授与されている<sup>140</sup>。また、アタナシオスの最大の政敵、アレクサンドリア総主教アタナシオス二世は、ミカエルとアンドロニコスの二人の皇帝から複数の修道院を与えられている<sup>141</sup>。したがって、地方都市ベロイアの出身で姓も伝わっていないニフォンの場合、キジコス府主教を務めていた時期に、首都での居住地および収入源として、上記二つの女子修道院を授与されたと考えるのがもっ

<sup>137</sup> Laurent, *Regestes*, no. 1519.

<sup>138</sup> V. Kidonopoulos, *Bauten in Konstantinopel 1204-1328* (Wiesbaden, 1994), 1.1.13, pp. 36-7; A.-M. Talbot, 'Building activity in Constantinople under Andronikos II: The role of women patrons in the construction and restoration of monasteries', in: N. Necipoğlu ed., *Byzantine Constantinople: Monuments, Topography and Everyday Life* (Leiden, 2001), 332. 創始者のアンナは、一二九三年の皇帝の弟コンスタンティノスの陰謀に連座して投獄されたミカエル・ストラテゴプロスの妻であった。PLP, no. 26893. キドノプロスとタルボットは、アンナがクラタイウを創建したのはこの事件の後か、一三〇〇年の夫の死の後のいずれかであると推測している。V. Kidonopoulos, *op.cit.*, 37; A.-M. Talbot, 'Building activity in Constantinople', 333. おそらくアンナは一三〇〇年代に、後任のパトロンを指名せぬまま他界したのであろう。

<sup>139</sup> アタナシオス自身が皇帝によるこの慣行を批判している。Talbot, no. 69.

<sup>140</sup> Pachymeres, VII, 37. アタナシオスの首都定着については、拙稿「ビザンツの隠修士とリヨン教会合同」『西洋史学』二〇六号（二〇〇二年）を参照。

<sup>141</sup> 詳細については、A. Failler, 'Le séjour d'Athanase II d'Alexandrie à Constantinople', *REB* 35 (1977), 43-71 を参照。



とも妥当である。

こうした事実は、皇帝とニフォンの間に個人的かつ高度に政治的な関係が形成されたこと、そして、ニフォンの首都への頻繁な訪問が皇帝から期待されていたことを示唆する。また、二つの施設がいずれも女子修道院である点から、ニフォンが皇帝に対して自らの要望を直接伝えた可能性もある。断定はできないものの、それらがニフォンに授与されたのはキジコスの危機がいくぶん和らいだ一三〇七年の夏以降であつたろう。海路の安全が確保され、ニフォンが首都に向かいやすくなったとすれば、皇帝とニフォンが首都で接触する機会も増したであろう。グレゴラスのニフォンに対する評が正しければ、ニフォンは皇帝と面会した際に、その社交性と生来の賢さによって皇帝に好印象を与えたはずである。確実であるのは、皇帝がキジコス防衛に力を発揮したニフォンを、アタナシオスとは性格を大きく異にする、有能かつ有用な聖職者として把握したことである。

次いで、ニフォンへの皇帝の好意と関係しているように思われるのは、アタナシオスの書簡がほのめかす彼をめぐる疑惑である。アタナシオス（および題目の記入者）によれば、ニフォンの行為は「聖像に対して狂乱する人々 τοῖς κατὰ τῶν ἁγίων εἰκόνων λυττώσιν」<sup>142</sup>のそれであった。聖像に対する狂乱とは、タルボットが述べるとおり、聖像そのものの破壊ではなく、聖像の周囲を飾る貴金属の除去と流用のことであろう<sup>143</sup>。理由が何であれ、総主教や教会会議の許可なくこうした行いを為すことは、明白な神聖冒瀆に該当した。ある修道士からニフォンの行為への告発を受けたアタナシオスは、首都に滞在するニフォンに対し裁判を実施することを望んだ。裁判の形式について、ニフォンは皇帝に二種の提案を行っている。一つは、皇帝が直々に裁判を開催し、原告と被告それぞれの弁論を聴聞すること。もう一つは、アタナシオスとその他数人が共同で裁判を開き、同じく弁論を聴聞することである<sup>144</sup>。アタナシオスは皇帝宛の別の書簡で、独自の調査をすでに行ったと記しているので、彼はニフォンが有罪であることを確信していたと思われる<sup>145</sup>。

主教が絡んだ事件であるにもかかわらず、なぜアタナシオスが教会会議を利用しようとしていないのかという疑問は残るが<sup>146</sup>、首都にいるニフォンが修道士から告発を受けると

---

<sup>142</sup> Talbot, no. 95, ll. 35-6.

<sup>143</sup> Talbot, no. 95 and commentary (p. 425)を参照。総主教ニフォンへの告發文を作成したニケフォロス・クムノスは、ニフォンがとある聖母子のイコンから三〇タラントの金銀を奪取したことを伝えている。

<sup>144</sup> Talbot, no. 89, ll. 23-8.

<sup>145</sup> Talbot, no. 95, ll. 32-3.

<sup>146</sup> これは、アタナシオスが二度目の在位期に、常設教会会議の開催を停止し、主教を参加

いう構図は、ニフオンの問題行動が彼の首都滞在時に生じた可能性を示唆する。この場合、皇帝からニフオンに授与された、ペルゼとクラタイウのいずれかの女子修道院が事件の現場であったということになる。ニフオンがこのいずれかの施設で実際に聖像を冒瀆したのだとすれば、修道士が告発者であることも理解できる。彼は施設を訪問したときにニフオンの行為を目撃したのかもしれないし、目撃者の修道女から別の場で報告を受けたのかもしれない。グレゴラスは、ニフオンがこの二つの施設から得られる収入を占有し、建築やその他のために用いたと報告している<sup>147</sup>。アタナシオスの書簡とその他の史料からは、ニフオンへの疑惑は、アルセニオス派への妥協を阻止すべくアタナシオスが仕掛けた謀略というよりはむしろ、ニフオンの実際の行為に根ざすものであったように見える。

今となっては事件の真相を明かすことはできないが、複数の同時代人が証するニフオンの賢明さはおそらく、実際的な政治的問題において真価を発揮する一方、宗教的な厳格さを多少なり欠いており、妥協や現実主義の名のもとで、ときに彼を逸脱へと歩ませるものであった。しかしシスマの解決を急ぐ皇帝にとって、多少の逸脱を含むとはいえ、ニフオンのこの賢明さがアタナシオスの厳格さに優ることは今や明らかであった。こうしてニフオンの前に、コンスタンティノーブル総主教位と生の新たな苦難へと通じる道が開かれたのである。

---

者とする会議を九月の年次教会会議に限定したことと関係があるかもしれない。ほぼ確かであるのは、皇帝か総主教のいずれかが主導権を有する会議でなければ、公正な判決が見込めないとアタナシオスが判断していたことである。アタナシオスと常設教会会議の問題については、筆者の博士論文の第三章を参照。

<sup>147</sup> Gregoras, VII, 260.